

「岳陽」と共に

あくまでも自分史として

(総集版)

P a r t 2

(第13～24号)

編集・発行

井上講四／堂本彰夫

令和6年4月

※本版は、令和5年4月から始めた新通信『岳陽』と共に」を通して読んでいただこうと思ひ、その後の後半分（第13～24号）を総集したものです。改めての、ご笑読をお願いするものです。なお、一部若干の手直しをしていますこと、ご了解下さい。ちなみに、その前半分（創刊号～12号）は、別途作成（令和5年11月）しています。

※連絡先

〒901-2225

沖縄県宜野湾市大謝名 3-13-24

教育協働研究所～岳陽舎～（井上講四宅）

Tel:098-963-9282／E-mail: gakuyou17@outlook.jp

HP URL : <http://www.gakuyou.jp>

「岳陽」と共に

第 13 号

発行日 2023.10. 15
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakyu17@outlook.jp

○終わるといつと「そこ」にあった懐かしい情景??

心情的には、甚だ複雑ではあるが、かの玉城青年の家が、新館建設・再スタートのために、近々壊される! 昨日(9/23日)、その施設(建物)の思い出を語る、言わば「お別れ会」みたいなものがあった! 参加者は、少し寂しくもあったが、それぞれの思いを胸に馳せ参じた人達である(初代専門職員であったKさん、最近、故あって辞めたN君を含む)!

私は、現在、相談役をやっているということもあって、多少遅れて、その会に顔を出したが、腰の調子も悪かったたので、その後の、施設巡り?には参加しなかった(同席していた、何代目かの所長Yさんと、事務室で、昔話に花を咲かせていた!)

私自身も、その施設での思い出は、それこそいろいろあるが、そこで行った、大学の授業の一環での宿泊研修(1泊2日)、及び何度目かの利用の時のご迷惑(深夜早朝までの学生との歓談?↓次の「朝の集い」の時の、当直の専門職員からの大いなる叱責!), またある時は、当時の若いミュージシャン(確かリッツという名?)とのミニライブや卒業生講話、そして、ゼミ主催の研究会の実施等、数々の思い出がある! 老朽化のためということであるが、その施設、そこで働いていた人、そして、そこを利用していた人にとっては、まさに、そこが、懐かしい情景を残しながら、「終わる」ということである! これもまた、一つの時代の流れでもある! なお、その敷地は、新施設の「キャンプ場」となるということである!

○調査団?の来所&夜の飲み会(うりずんの誓い?)

これもまた、同日(9/23日)、ある調査団?4人が(その中には、40年振りという、院政時代の知り合いHさんもいた! 彼は、見るからに、素敵な老紳士となっていた!), 我が「岳陽舎」を訪れてくれた! 出来合いの出会いとも言えるが、現今の「教員の働き方改革」に関わる政策談義ともなり、折角の機会でもあったので、私なりの評価と意見陳述も行った! :

ここでの談義が、どのように、その調査団?の研究成果につながるのかは、まったく分からないが、若干なりとも貢献できることになれば、これほど嬉しいことはない! ある意味では、知己との再会の場であったことは否めないが(特に、Hさんとの再会は、過ぎ去った広島/院生時代のことを、否が応でも呼び起こすものであった!), 久し振りに楽しい時間となった!

その後、無理やり、私の午後の用事(※上記)に合わせてもらう形で、南部のエスニック料理店(ニライカナイ橋の近く。確か「カフェくるくま」という名)で、昼食を共にし、その地での絶景(本当に素晴らしい!)を、一緒に楽しませてもらった! そして、青少年の家まで、送ってもらった! さらに、その後、これも予定していた、那覇での「夜の飲み会」では(「うりずん」という、場所も含めて、所長のTさん、北部のSさんも含流!), 場所も含めて、とても懐かしく(ドウル天、ドウルワカシ※田芋料理も含めて!), 多少の?酔いに任せて、「うりずんの誓い?」まで叫んだ次第である(どんな誓いかは、今のところ?)!

○孫達への賛歌?無理矢理?我が青春を重ねる?!

さて、今回も、ここでは話ががらりと変わるが、過日の、宮崎県に住む双子の孫達のことである! 中学生最後の試合(サッカークラブ)で、これまで、ザーとBチームであった彼らが(いわゆる控え選手?たまに、一軍の試合に出ていたが!), 今回はスタメンで出場したとのこと(ただし全員出場! 指導者の配慮?そこに教育としての、当該少年サッカー部の意義が凝縮されている?)! として、ゴールとアシストを、それぞれ果たしたとのこと! しかも、勝利したとのこと!

彼らの喜び、そして、直接その雄姿を見られなかったこと、残念さ、そういうものがあつて、知らせを聞いて(一日過ぎていた! 我が奥さんのラインチェック遅れ!), 直ぐにLineを通じて、彼らに告げたかったことを話したということである! 余計なことではあるが、私が、そのような行動に出たのは、もちろん、孫達に直接声をかけたこともあるが、メールで知った、母親である、我が長女の喜びにほだされてのものであったことは言うまでもない(母親として、本当によくやってきたと思っ!)!!

しかるに、それは、自らの少年時代のことであるが、中学、高校と、野球部に所属し(基本的には、主将で、エースで4番?高校の時は、エースではなかったが!), 本当に野球漬けの毎日を送った私である! だが、結局は、双方共に、夏の最後の大会では、惨めな、早期敗退を喫してしまった! 何のために、頑張ってきたのか? 最後の様は、何と情けないものであったのか? そんなことを、心のどこかで引きずりながら、この年まで生きてきたわけであるが、ある意味、孫達は、それとは違った思いを持つことができたのではないか? 頑張れば、報われる!!

要は、彼らは、レギュラーではなかったが、これまでよく頑張ったということ、ある種の自信として、そして、これからも続く長い人生において、たとえその時は負けたとしても、それをやらない方がよかったというようなことは決してなく、とにかく、自分で決めたことは、最後までやり通して欲しい(後悔や愚痴も、その時々においては出てくるかもしれないが!)! ということ、直接伝えたかったということである! (井上)

○自然科学と人文科学の違い、そして、その役割!!

表面の記事にあるように、今回、我が家（「岳陽舎」）に、4人の調査団？が訪ねて来てくれた！調査の目的は、現在大きな課題となっている「教員の働き方改革と教員評価（のあり方）」について、現地調査及び、当地の研究者との意見交換をしたいというようなものであったが、同時に、そのメンバーとは、久しぶりの再会ということでもあった（ある意味、そちらがメイン？）！

尤も、ここでは、その報告的なものを書きたいということではなく、改めて、少し時を置いて考えてみた、いわゆる「自然科学と人文科学の違い、そして、その役割!!」というようなことを、少しだけ述べてみたいと思う次第である。

今回の、彼らの研究調査旅行にケチをつける気は毛頭ないが、I氏も含めて、これまで、数限りない研究者（何も大学の教員に限らない！）が、まさに「教育（事象）」に関わる研究をなしてきたということであるが、その成果は、現在、どのように活かされているのか（表面的には、ほとんど活かされていない？）!!

と、そのようなことであるが、そこにある「真実（真理）」を、どのように受け止めればいいのかという、ある意味では、古くて新しいテーマということでもある!!言い換えれば、「教育（事象）」を対象とする学問・研究の限界（ジレンマ？）を、どのように克服していけばよいのかということでもある!!

単純に言えば、その学問・研究（の成果）の広がり（高まり）は、いわゆる自然科学と人文科学のそれとでは、かなり（否、まったく？）違うのではないかということであるが（前者は、答えは一つ）、教育（事象）を対象とする教育（科）

◎学は、そのどちらの要素も有している（言わば「複合学問」）、単純な区分け論は出来ない!!

ちなみに、より客観性・実証性を重視するため「社会科学」というような言い方もあるが、いざれにしても、自然科学には、その対象事象の真実は一つであるということ、一方の、人文科学ないしは社会科学のそれは、そうではないということ、だから、現実世界においては（研究者のそれであろうが、現場のそれであろうが）、必要な真実を共有することが難しいということである!!

それが、悔しくもあり、哀しいことでもあるが、せめて、多くの人（全員と言いたいところであるが！）が、この考え方、このアプローチでいこうというような理論（公理？）が出現したらなあと思うのであるが、これはまた、夢のまた夢なのであろう!!

〈短歌に託して〉少しは、涼しくなったか!!

・終わるということ ただしそれは

次があるということ!! そうでなくては!!

・“うりずんの誓い?” 一時の酔い(宵)か?

ビールと泡盛 切に背中押す!!

・やらない方がよかった? そんなことはない!

それをどう受け止めるかが 重要なのだ!

・真理の追究 大切なものの追求!

どちらも 科学が求めるもの!!

・エンタメ風とは言うが それは自信?

古代の謎は 彼らが解くかも!!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕◎

○似非「旅枕」?しかし、「ここ」では、是非書いておきたい!!
ある意味突然ではあるが、「ここ」で、是非書いておきたいことがある。なかなか、本物の旅枕?をなすことが出来ないということもあるが、最近YouTubeでの動画視聴というところで、私にとっては種の旅枕?が、そこに実現している!!言わば、似非「旅枕」?ということであるが、ここでは、これまで知らなかった知る努力もなかった、様々な情報、有名人の視点が数多く得られているということである!本当に凄いな達がいるものである(尤も、トビモノない人達も多いが!!)

それはともかく、「ここ」で、是非紹介したいのは、怪しげな若者コンビ(サム&マサキ/漫才芸人風?)が提供している「TOLAND VLOG (トウランド・ウイログ)」である!それは、「日本神話や世界の神話などの『謎』に注目して、分かりやすく解説するチャンネルで、登録者数は3月現在で14万人を超える人気チャンネルです。」とある!現在の登録者数は、私自身は知らないが、どの動画にも、(他の類似動画と比べて)圧倒的な視聴回数が刻まれている!

彼らは、事あるごとに、「エンタメ風」とは言っているが(もちろんその要素も多分にあるが!)、私には、遙かにそれを越えて、我が国の「謎多き古代史」への確かな解明材料、視点を提供してくれているように思えるのである(かの「古史古伝」等も含めて!)!!古代史研究家とは、一言も名乗っていないが(むしろ実業家?)、こんな若者(厳密にはサム)がいるのである!何と云うことか?脅威としか言いようがないが、個人的には、これから、かの九州王朝説と近畿王朝説との、言わば果てしないバトル?にも参入して、その新展開(真実?)を導いてくれるならば、これほど頼もしいことはない(その素地は大いにある!)!!他にも、何人かは紹介したい人(ブログ)もいるが、今回は以上!(つづく)(堂本)

《編集後記》10月に入って、ここ沖縄でも、それなりの秋の到来を感じさせているが、まだまだである!!書きたいこと、書かなければいけないと思うことは、やはり生きていく以上、それなりに出てくるのであるが、誌面作成とのタイムラグもあり、その時の思い、感覚が、少し怪しくもある!!古代史の方は、予想外の動きである(目の疲れは最高潮?)!! (井上/堂本)

「岳陽」と共に

第 14 号

発行日
2023.10. 30
編集・発行
井上講四/堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○非情な(解せない?) 采配?そこには何があったのか?!

随分日が経ってしまっただが、過日の、女子世界バレーボール選手権(オリンピック代表予選)。日本は、結局ブラジルにも負け、残念ながら、今回での代表決定には至らなかった!そして、そこにおいて、最後の二セットは、これまでで中心選手(主将でもあった!)として奮闘してきた古賀紗理奈選手の姿がなかった(ネット上で騒がれていた!!)!

何か、第3セットの終了時点でトラブルがあったものかと、その時は思うだけであったが、試合終了後のインタビューでは、自分自身は、調子は悪くなかった!その理由(不起用)については、監督に聞いてくれというようなコメントであった!問題は、その後の、真鍋監督の言である(決定率、効果率、返球率が下がっており、ある意味交代は、理の当然だ!)。これは、下衆の勘繰りかもしれないが、今回の成績(実力?)でも明らかのように、たとえ今回の機会出場権をとったとしても、今(まで)の古賀選手(中心のチーム)であれば、おそらくメダル獲得は困難!!監督は、そう思ってたの采配ではなかったのかということである!!

そこで注目されるのが、その非情な(解せない?)扱いを受けた古賀選手の、これからの踏ん張りである!!試合後の涙もなかったが(采配への怒り?負けた情けなさ?)、とにかく、その悔しさを、どのように晴らすのか?そこが重要であるということであり、それがまた、監督の本当の思いなのかかもしれない!!そんなことを、思った次第である!

○研究者としての倫理?今更質されても?!

これも、過日のことであるが、半分笑い話?として、ここで書き記しておくのも一興かな?とも思い、以下、少し書いておきたい!実は、ひよんなことから、思いも寄らない行動(勉強?)を余儀なくされたのである!

どんな行動(勉強?)かと言うと、何と、あの独立行政法人日本学術振興会の「研究倫理eラーニング」の受講である!最近?、岡山にあるK大学のS教授(二応教子という)で、S君と呼んでもいいが!から、研究協力者としての依頼(本当は、私のボケ防止のため?)が増えているが、今後、それを行うためには、私の適格証明?が必要だということ、指定の「研究倫理eラーニング」の受講を課されたのである!

別に、私は、そうしたことまでして、彼の研究協力者にはなりたくないのだから(可能なことは、すべて協力するつもりである!)、科研費等の実施にあたっては、そのことは必至(義務)であるということなのである!

折角の、彼からの依頼でもあったので、むげに断ることも出来ず(当然、最初は断ったが!)、結局は、引き受けた次第であるが、その受講の手間暇(サイトへの入室手続きが、自分でも情けないくらいにかかり、改めて、彼の依頼を悔やんだことを(笑。本当である!)、ここでは、是非とも名状しておきたいということである!

ということ、修了試験?には、無事合格することは出来たが、私が、内容よりは、パネル操作?に難渋した高齢者、そして、今更、研究者としての倫理を質されても?と思った、元研究者でもあったということである!

○小さな山の林立がその「お山の大将?」だけでは?!

さて、全国には(もちろん沖縄にも!)、地域のため、みんなのために、自分の人生を賭けて?頑張っている人達がいる!しかしながら、それは、ある意味「小さな山の林立」となっていないか?!こんなことを言えば、彼らへの冒瀆ともなるが、もう少し、その山々が互いに力を出し合い、さらなる山(大きな山?)とならないか?というところである!

そんな中、その「大きな山?」で、私には、ある意味大変懐かしくもあり、複雑な思いを抱かせるものがある!!それは、九州のM先生達のことである!そして、彼らは、まさに「大きな山」であり、その中心M先生は、学会・先輩の中では唯一とも言える、本当に敬愛して止まない人であった(まだご存命のはずである!)

当地での研究会の立ち上げ人であり、今でも理論的、精神的な支柱として活躍されていると思うが、私も、沖縄に来てから、年1回当地で開催されるその会には、毎回参加していた(「世話人」として)!要は、彼らは、私達にとっては、ここで言う「大きな山」であったということである(その影響力は、それこそ偉大!)!!

ちなみに、それには、実に多くの事例発表者(手弁当参加)、そしてゼミ生も連れていった。余談ではあるが、私自身は、事例発表等よりは、友人達との再会、夜の懇親会やその後の三次会?が、何よりの楽しみであった(元気を貰う、回復させる?数少ない機会であった!最早時効ではあるので、その時々私から誘われた人は、大変申し訳ないが、山車?であったということもある!!)!

ただ、ここで書いておきたいことは、たとえばどんなに「大きな山?」であっても、そこだけの、いわゆる「お山の大将?」であってはいけないということである!実は、私も、M先生とは比べものにならないが(比べること自体不遜?)、どこかの地の、小さな「お山の大将?」であったかもしれない!!とにかく、みんなが、そればかりではいけないということである!(井上)

○こんなこと(祭り?)は、やはり必要なのだ!!

いきなりであるが、何とも微笑ましい、そして、内心ではホッとする?テレビ番組であった!しかも、それは、あの大都会東京、しかも新宿での話である!ちなみに、関係のネット記事では、次のようになっていた!大都会の高層ビルにこだまする熱唱。この夏、会社員たちがパフォーマンスを競う大会が4年ぶりに復活した。出場者たちは何のためにステージに立ち、何を手にしたのか?新宿・副都心で50年近く続くサラーマンの祭典「会社対抗のど自慢大会」。会社のプライドをかけてハイレベルな歌とパフォーマンスが繰り広げられる。4年ぶりとなる今回、出場者たちには大会にかけるそれぞれの思いがあった。コロナ過で就職した2年目社員は上司や同僚との会話のきっかけを作りたいとステージへ。出場希望者が見つからない会社では、常務が驚きの選択を、働き方改革の時代に、会社でのど自慢に出る意味とは?10月1日放送分

ところで、この番組は、NHKの「Dear」ってぼん」という番組であるが、この番組の趣旨は、「この時代をどう生きていったらいいのだろう?いま、多くの人々が不安を抱えたり迷ったりしながら生きています。2020年4月にスタートしたDearにっぼんは、日本各地でひたむきに生きる人たちの取材者が入り、今の時代を生きていくヒントや、未来への希望を探し、あなたに届ける番組です。」とある!また、「日本各地の『いま』をひたむきに生きる人たちが見つめ、大切なものをあなたに届けるドキュメンタリー」ともある!

ということ、今回のネタ(人間模様)は、時代の最先端を行く人達のところ、すなわち新宿での話である!しかしながら、考えてみれば、それは、ある意味時代の反転現象、言い換えれば、人間社会の重要なものが復活?している!!そう言えるのかもしれない(目覚めているかどうかは分からないが?)!!とにかく、やはりそういうことは必要なのだ!!頑張れ!ひたむきに生きる人達!!

○「今」、それぞれの「存在と時間」の中で!!

一方でまた、さらなる悲劇(中東地域)が加わっている!しかし、今の私達?には、眼前の「それぞれ」があるだけである!ハイデガー風に言えば(ただし、深くは分かっていない!)、そこには、それぞれの「存在と時間」があり、その「今」は、それぞれの、これまで(過去)の結果であり、これから(未来)の原因でもあるということである!!

いずれにしても、問題は、個人と社会/集団全体(国または世界の「今」の不整合?である!個々人には、折角生まれてきたのだから、そこで生きる意味や目的を見つけ、健気に生きよ!そのようなことかもしれないが、残念ながら、現実の社会(世界)は、往々にしてそれを許さない!!

ただし、そうは言っても、孤独(孤立)ではダメで、家族は当然であるが、他者、友人や同僚の存在や、それとの関わりが重要であるということだけははっきりしている!!それを示したのが、いみじくも上段の話であるが、その逆の、哀しい出来事も、残念ながら多いのもある!!

・監督の 思いや計らい?
結果がすべてだが それだけでもなく!!

・研究者としての倫理?
今更質されても どうしようもなし??

・それぞれの小山 林立だけでは ダメなのだ!
力を合わせて 大山にならなければ!

・やはり祭りは 必要なのだ!
そこに 人との交わり あればこそ!!

・存在と時間 せめて己の 生きる意味
そを知らずば ただの空言??

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕(14)

○「倭国大乱」は、「準備されたストーリー」に絶対投影されている!!
先号でも述べたが、現在、ネット記事「フログを言ひ」やYouTubeの動画で、これまで知らなかった、分からなかった情報(新知識)ただし、その真偽自体は、多くは保留!!に、それこそ多種多様に接している!そして、大なる刺激を受けている(特に、「神話」やそこにおける「神々」の正体及びその関係等の解明?)!ある意味、見事なものである!!

そんな中、自身の興味・関心(課題)は、「記紀」(とりわけ『日本書紀』)においては、ある意味「最初から」、そうした神話や神々の関係等には「準備されたストーリー」があったということは、自分なりにも推察してきているところであるが、問題は、その「準備されたストーリー」とは、果たしてどのようなものであったのかということになる!!

ただし、このコーナーでは、それとの関係で言えば、まずは、『魏志』等が記している、かの「倭国大乱(2世紀末)」が、そこに、どのように組み込まれているのかということが、重要な注目点となることは言うまでもない!!何故なら、その「倭国大乱」の結果、少なくとも北部九州では、それまでの、「倭奴 邪 国」(後漢から印綬を中心とする、言わば「旧倭国(連名)」から、「邪馬台国」(魏魏倭主を盟主とする、言わば「新倭国(連名)」が出現したということが、事実として考えられるからである!

ちなみに、その「倭国大乱」であるが、北部九州だけのそれを指すのか、あるいは西日本全体(一部関東近辺までを含む?)を巻き込んだものを指すのか、それについては、まだまだはっきりしない(ただ『魏志』のそれは、その記述領域からすれば、北部九州でのそれを指していたと考えられる!!)!!しかし、いずれにしても、その「大乱」の後に、「卑弥呼」を共立した勢力(新倭国(連名))が、「邪馬台国」を王都として、それまでの、倭奴(邪 国を中心とする「旧倭国(連名)」から、その政(覇 権)を奪取したということになるので、その前後の、諸勢力の攻防(それに伴う人々の移動・進出の経緯)が、かの「準備されたストーリー」に投影されていることは、絶対に間違いない!!そういうことでもある!!(つづく) (堂本)

○「編集後記」沖繩も、かの湿気から解放され、それなりの秋となった!我が岳陽舎の二階ベランダから見える「東シナ海」の蒼も素敵である!このまま季節の移ろいを堪能したいものである!古代史の方は、やつと佳境?に入れそうである!! (井上/堂本)

「岳陽」と共に

第 15 号

発行日
2023.11.15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○人間社会における「最適(解)」のゆらぎ!!

これもまた、随分と日数が経ち、そのことを書く意欲もかなり減退しているが、一応準備していたことではあるので、若干書き記しておきたい!それは、過日行われた将棋の王座戦最後の対局の、ある種の裏話?のことである!

すなわち、その対局では、それまで7冠の藤井壮太九段が劣勢の状態、前王座の永瀬拓矢九段が、ほぼ勝利かと思われたが(かのAIはそう指示していた!)、結果は、藤井7冠の勝利で終わった!永瀬九段の、ある一手(詰め)の間違いで、戦局が大逆転であったそうである!

判断ミス、脳の疲労?多分そういうことであつたということらしいが、注目されるのは、そのミス?が、藤井7冠の誘導とも言われていることである(具体的にはどういふことか分からないが!)!!要は、その時その時の、言わば「最適(解)」は、生身の人間の(思考の)やり取りの中では、そのように振舞えないこともあるということである!!

この場合は、「最適(解)」が、必ずしも勝利をもたらすわけではないということにもなるが、ここには、ある興味深い真実?が隠されているようにも思えるということである!!それは、たとえAIが最適(解)を示しても、人間は、それに応じられない場合もあるということ、さらには、わざとAIに最適(解)を出させ、その裏?をかいて、あることを実行することも出来るということである!!

その意味では、AIは、人間の思いの裏の裏?までは読み切れないということであるが、今後、このAIと人間の関係は、どのように推移していくのであろうか?かの「生成AI」の功罪も、おそらくそこに収束していくのかも!!

○古希過ぎた教え子が恩師訪ねる!しかも、奇跡も!!

過日(10/21)、面白いことが起きた!と言うよりは、普通では、ほとんど見ることの出来ない光景を、見させてもらったと言う方が的を射ているであろう!!しかも、ここでは、私にとっては、奇遇というか、ほとんど奇跡?に近いことまで起きてしまったということである!何という日であつたのであろうか?

そこですすは、その光景であるが、同日久しぶりに、高校の同期とのズーム交流を行ったのであるが、一つの交流先には、いつもはそれぞれに参加している3人(共に福岡在が、彼らの担任(2年時?)であつたY先生(現在81歳!)の自宅(唐津在)を訪ねていて、その先生も交えた、予期せぬ再会の場となつたということである!

古希を過ぎた高齢者?(教え子)が、3人で申し合わせて、遠く離れた、高校の恩師宅を訪ねるということ自体が、そもそもあり得るのかということもあるが、さらに、その4人と、他の3人(福岡一人と沖繩)が、ズームで、昔話に花を咲かすということがあるなんて...!

しかも、驚いたことには、そのY先生が、私の出身大学である広島大学の先輩であつた!さらには、同じ寮生(薫風寮)でもあつた!そういうことが判明したのである(ほとんど奇跡?)!短い時間ではあつたが、当時の学生生活が、懐かしく思い出されたことは言うまでもない!よもや、こういう展開になるうとは、夢にも思わなかつたが、ズームという文明の利器が、こんなことまで実現させたのである!いつかまた違った形で、思わぬ再会があればいいなあと、思つてもみた次第である!

○“教育”と“学習”の関係は、未来永劫続く!!

ところで、今となつては、かなり懐かしい思い出となるが、かつて、「教育」と「学習」の関係について、深く考えさせられることがあつた!それは、1980年代前後の「生涯教育/学習」論議のことであるが、課題の性格上、「教育」ではなく、「学習」とすべきだという論議が、かのユネスコも含めて、かなり広範囲に展開されたということである!

もちろん、ここでは、学校教育後の成人の学習に目が向けられたわけであるので(ユネスコ「成人教育推進国際委員会」、個人の自主的・自発的な学習が求められるというようなこともあつて、「生涯教育」よりも「生涯学習」の方が、より相応しいというような論議であつたように思う(現に、我が国においても最終的には「生涯学習」という用語で、関係法制度、各種施策・部署名等が統一?されていったことは周知の通りである)。

ただし、私は、その論議(の広がりや成果)が、学校での、子ども達の教育のことも含んでいるので、そうした法制度や施策・部署名ではなく、やはり全体としては「生涯教育」という言い方(考え)が望ましいとと考えていたし、その重要性についても、声を大にして述べてもきたわけである(ある時期までは、かなりの少数派であつたことを記憶している!学会においても!!)!

要は、子どもの教育であるが、大人の学習(教育)であろうが(こちらは、「支援」ということを、必ず明示していたが!)、一人ひとりの生涯に亘る「学習」を鼓舞し、支援することが、「教育」であることを見出し、そのための有効な施策とか組織づくりを行うことが必要であるということであつたわけである(その理論的支柱が、かの「ダテ・ヨコの統合理論」であつた!)

ちなみに、学校(子ども達の)教育においても、「教育」のもつ「従属性(上から与えられる?)」を排除して、「学習」、さらには「学び」を主張する人達もいた!気持ちには十分に分かるが、他者からの望ましい働きかけ(これが教育の本質!)は必要であり、それが、社会全体の力ともなる!!ただ、問題は、その現実の姿であつたことは間違いない!!そこに、「教育」を忌避せざるを得ないような実態もあつたということである! (井上)

『改めて、「国」とは何かを問う?』

先号でも触れたが、今、再び(本当は、もっと多く、否
常であろうが?)、そこに生きる人々にとつて、自らが
属している「国」とは何か?そういうことを考えさせら
れる事件・騒乱(はつきり言えば、戦争という名の「悲劇」
が頻発している!)

そんな中、民族(人種)、言語(文化)、宗教ないしは思
想・信条(政治体制)、そして、歴史的経緯(戦争や植民地
支配等)、それらによつて、多種多様な国々が、一応は「世
界/国際社会」という枠組みの下に存在しているわけ
であるが、現実には、そこには、次のような形(極めて不
安定な約束事?)があり、それら全体を含んで、「世界/
国際社会」と言っているということである!

すなわち、まずは、「領土・領海・領空を有する」独立
国家() というものを形成している。次が、そうした形
を有しないまま、自らの生存圏域を維持する(統治委任
国)。次が、民族(人種)としては存在するものの、他
国の枠組みの中で生きている(そうせざるを得ない!「自
治区」等)。改めてよく見れば、我々人間は、そういう国
家群状況の中で、生まれ育ち、生きていくわけである!

もちろん、すべての人々が、それぞれの「国(独立国
家)」で生まれ育ち、生きていければ、それが一番よい
のである(ただし、結婚や就職等の関係で、他国で生き
る、他国民となることは、個々人の自由意志によるものであ
れば、それも当然である!)、実際には、そのような自由や自
己選択も叶わない人達がいる!そこに悲劇が起(こ)り、繰
り返されるのである!それが問題なのである!!

ただし、さらによく見てみれば、たとえそうしたこと
があるにしても、極めつけの不幸は、そうした体制・状
況の存在を顧みず(踏みにじつて!)、他国、あるいはそ
こに生きる人々の権利や命を、一方的に、しかも武力で
奪つてしまふ国・勢力があるということである!
このようなことは、絶対に許されることではなく!

『それこそ「世界/国際社会」は、その阻止・撲滅に一致
団結しなければいけない!それが、まさに「国際連合」の
使命であり、存在意義でもあるわけである!
だが、そこは、そこに表象される「世界/国際社会」と
は名ばかり?言い換えれば、自らの利益の駆け引きの場と
なり下がっている?幾つかの「特権国家」の、時々都合
のよい談合の場ともなっている?そのようにも言える!!

まあ、このように言つても、ほとんどが空しい?もので
あることは、世界中の多くの人達が感じていることであろ
うが、しかし、それで終わらせてはいけないのである!事
実、多くの心ある人達は、自らの出来ることを精一杯やっ
てきたし、これからもやっけていくであろう!それが、単な
る悲劇の繰り返しを、阻止してきたわけでもある!!
いずれにしても、人類は、6万年前にアフリカを出て、
世界各地へと旅立つていった!そして今、目下の「世界/
国際社会」を創り出している!だが、それはまだ、その「グ
レートジャーニー」の途上なのかもしれない!!

〈短歌に託して〉秋の憂い?今回は少し書き過ぎか?!
・最適(解)? あるかも知れぬが、掴むは別?
その神域? AIはど(こ)まで?
・古希となり 訪ねられることあつても
訪ねることなし? 違いは何?
・教育と学習 その対立? 何故に生まれる?
世代のつなぎの 難しき!!

・国益? 同じ国とて 何故違(たが)う?
そこにありしは 哀しき人の世!!

・続いている? グレートジャーニー!
時間と距離では 終わつてはいても!!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕(10)

○「倭国大乱」と、そこにおける「大幡主」の謎(怪?)!!

先号では、かの「倭国大乱」及びその前後の顛末は、「日記」(直接的
には「日本書紀」)において、件の「準備されたストーリー」に、絶対に投影
されているということ述べたが、こ(こ)ら辺りの経緯や諸部族の動きが、具
体的にどうであったのかということが、改めて問われてくることは言うまで
もない!そこに、どうにも訳の分からない人物(神)がいる!それが、「大
幡主命」(初代奴国王?大若人命、武埴彦彥命とも?)である!

ところで、実は、その神(命)を祀る神社(「櫛田神社」等!ただし、有名な
博多の櫛田神社は、何故か伊勢からの勧請という!)が、北部九州(現在の福岡
県・佐賀県一帯)に数多くあるのである(ただし、祭神の入れ替を背後に隠さ
れている!)、かの2世紀末の「倭国大乱」によつて、その命(神)を王とし
ていた「倭国」は衰退を余儀なくされ(政權移譲)、彼ら(その王族)
は、近畿、そして、伊勢の方へ移動している!ということらしいのである(事
実、その伊勢には、櫛田神社や櫛田川という地名がある!)!!

とは言え、そんな彼(神?)が、今日まで、その北部九州に、多種多様に?
祀られているということになれば、この近辺の人達は、その「大幡主命」(天
若人命)をこ(こ)ろなく敬愛しており、その時々々の権力者・支配者の目を掻い潜
つて、丁重に祀っている!ということにもなる!!なお、かの伊勢地方の豪族と
されている「渡会氏」(伊勢神宮外宮の宮司)は、本来は「磯部氏」とされ
驚くなかれ、かの「伊都国」の出身ともされている!である!!

また、例の「丹生氏」(丹の発掘・精製氏族)も、その伊都国の出身と自称
しているようであり(「和歌山県伊都郡」「丹生津姫神社」等)、北部九州から
の移動(移民?)の事実は、決して見逃せないものとなっている!!

またまたその子細については、よく整理出来ないが、そのような史実が、
こ(こ)で取り上げている「倭国大乱」と、どのような関係となるのか?その中
でも、「大幡主命(天若人命)」が、どのよ(よ)うな動きをなしたか?その辺り
を、今後論(ろん)じていきたいと思(おも)っている次第である! (つづく) (堂本)

〈編集後記〉沖繩は、少し涼しくなつてきました!が、みなさん
の方はいかがですか?危惧された、その後の台風襲来もなく、変
わらずのんびりした日々ですが、パソコン生活は、さらに拍車
がかかっています(YouTube視聴も加わつて!)!!目と腰、そして下
肢の具合もあります!が、今はやるのみです! (井上/堂本)

「岳陽」と共に

第 16 号

発行日
2023.11. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○二極化は宿命?それどちらかに与せなければ...!!

まだ、それほど人生を達観するほど生きたわけではないが(ただし、古人と比べればそうでもない?)、世の中(人間社会)は、「良い/悪い」、「勝つ/負ける」、「あるいは賛成/反対」、「与党/野党」というように、いつのまにか、二つの極(価値?勢力?)に分かれていく!!そして、「敵/味方」というようなことも、それと同じであろうが、人間の生き方(生き様)、そして集団のあり様は、結局は、そうした「二極化」の流れ・力の中で翻弄(蹂躪?)される(それは、ある種の「宿命」とも言える?)!!

しかしながら、実際は、その二極化は、単純なものではなく、明らかに多くの人を悩ませ、その中で苦しみを倍増させながら進んでいく!!それは、「二国」のあり様もそうであるが、そこにおいては、どうしても、どちらにも与ることができない個人や集団(国)を生み出すということにもなる!!そこに、第二極の居場所やスタンスが確立されればよいのであるが、多くの場合はそういうわけにはいかない?否、最終的には、不本意ながらも、どちらかに与させられる(選挙等は、その典型である!)!!

現在、「多様性」の主張ということ、あらゆる分野において、そこでのパリエーション(グラデーション?)に基づく価値や生き方が指向されているが、そのことは、ここで言う「二極化の宿命(悪魔性?)」にどのように対峙しているのであろうか?決して綺麗ごとや掛け声だけでは済まされないのであるが、文学や芸術の世界はともかく、虚脱や厭世、あるいは憎悪だけで生きていかなければならないことだってあり得る?そうも、思っているのである!!

○「ユーチューブ(動画)」「のこ」と!

前にも述べたように、最近では、「ユーチューブ(動画)」視聴で、私の「ライフワーク」としての古代史研究?(?ってほどのものではないが!)が、質はともかく、量(範囲)的には、これまでもとは比べようもない情報収集や新たな視点の獲得につながっている!このことは、残念ながら?明白な事実であり、その存在意義には、最早疑義を挟むわけにはいかない!変われば、変わるものである!ということ、ここでは、そのことを、私の「セルフヒストリー」の、一つの重要なメルクマールとして位置づけ、それが「メディア」としての意義や可能性について書き記しておきたいということである!古希を過ぎた高齢者、そして、かつてこうした文明の利器?をかなりの危惧(インフルエンサー)と称される怪しげな人物?として、その職業化への動きに対する嫌悪感?でもって、傍から眺めていた私であったということである!

ただ、改めて心配されるのは、巷間言われてきたように、旧来のマスメディアとの競合(特にテレビ?)であるが、単なる杞憂論では、最早その存在意義は打ち消し難い!簡単に言えば、どちらも重要なメディアだということであるが、これも、上記の二極化の運命を辿る!!ちなみに、YouTube (Google 社が運営する世界最大の動画共有サービス)は、「投稿者に誰でもがなれる」というのが、その最大の魅力(武器?)であるが、何がどのように淘汰されていくのかは、私にはまったく予想もつかない!場合によっては、想像を絶するような大変革(困惑も含めて?)を導く!!その兆候は、今も、既にある!

ところで、これまた恥ずかしながら、その「ビットコイン」については、初めて知ることばかりであったが(とりわけ技術的なことは、ほとんど分からなかった!)、その開発者の「サトシ・ナカモト」という人物の謎が、本当に興味深かったということである(彼は、何のために、それを開発したのか?)!

○「サトシ・ナカモト」?「ビットコイン」?

ところで、これもまた、上記と同じような「文明の利器」についての話となるが、これについては、いささか複雑な心境ではある!と言うのも、同じように、便利で、有意義な発明品であった(もちろん、それがもたらす害悪や不正も、同時に存在するという両面をもつものとは言えるが)、その発明者/開拓者自身が、その「利器性」を途中で放棄し(自らが欲していたような動きとならなかつた?)、その世界から、忽然と消えていったというようなことを知ったからである!

しかるに、今日(11月14日)、いつものように、夕食後のテレビ視聴の時間帯で、他に興味を持たせるリアルタイムの番組がなかったため、たまたま録画してあった番組を見たのであるが、それは、NHK総合の「市民X 謎の天才『サトシ・ナカモト』」というものであった!番組を見始めると、すぐに、私にはまったく無関係な(むしろ嫌悪感を抱かせる?)「ビットコイン」に関するものであった!

要は、ここで書いておきたいことは一つである(否、二つかな?)!これまた恥ずかしながら、その「ビットコイン」については、初めて知ることばかりであったが(とりわけ技術的なことは、ほとんど分からなかった!)、その開発者の「サトシ・ナカモト」という人物の謎が、本当に興味深かったということである(彼は、何のために、それを開発したのか?)!

そこで、それについては、次のような記事があるので、その顛末としたい。すなわち、「今世紀最大級の技術革新、ブロックチェーン(事実上、改ざん不可能な分散記録システム)を世に放ったビットコインの生みの親「サトシ・ナカモト」。2008年、世界金融危機の中、突如現れ、こつ然と姿を消した存在は何者か?」「現代社会、最大のミステリー」とされる謎めいた存在の光と影、功罪に迫る」。つまり、途中でいなくなったのである!なお、この番組は、「名前も、金も、名譽も要らぬ」。正体不明、動機不明の謎の存在「市民X」が社会を揺り動かした出来事の真相に迫る新シリーズ」とある!このことも、ここでは是非書いておきたいということである!頑張れ、NHK!(井上)

○「凋落」の三つの原因？ある意味「真理」かも!!

今回は(もう)、かなり社会的なテーマが多くなるが、これまで漠然と思っていたことが、学問的に示されているように思えて、後追的な言い振りとはなるが、ここで少し書いておくことにしたい。それは、ここでもまたネット記事からではあるが、「日本はなぜ凋落したのか」アラブの歴史家が指摘した『三つの原因』から考える「デیلیー新潮」を見たことがきっかけである。

そのリード文には、「太平洋戦争の敗戦から一転、戦後は高度経済成長を遂げて、一時は『ジャパン・アズ・ナンバーワン』とまで言われた日本。しかし、バブル崩壊以降は長期停滞に入り、二〇二三年のGDPはドイツに抜かれて世界4位に転落する見込みだ。」とある。確かに、その事実？は、既に公表されているが、何故ここに、「アラブの歴史家」が？という興味もあつたので、その後を讀んでみた次第でもあるが、その記事は、「戦後の国際政治学をリードした高坂正堯・京都大学教授(1934~1996年)が、アラブの歴史家「イブン・ハルドゥーン」の思想を手掛かりに、文明が衰亡する原因を論じた、彼の『幻の名講演』を初めて書籍化した、新刊『歴史としての二十世紀』(新潮選書)から、一部を再編集して紹介するもの」とあつた。

最初は、私には、こうした文脈で、何故、アラブの歴史家「イブン・ハルドゥーン」が出てくるのか、まったく予想もつかなかったが(高校の世界史で、確か名前だけは憶えていた)、読み進めると、その理由が、改めて分かつた(余計なことだが、高校の授業では、そういうことまで扱うことは無理であつたということもある)！

労働力不足、若者の就業意欲の低下(ひきこもり状態)、社会の活力の減退？そういつたことが懸念されている我が国であるわけであるが(GDP世界4位は、それが原因？)、高坂氏によると、「大衆が貧乏で一部が贅沢では国全体が禁欲的になりません。禁欲の精神が国」

民に行き渡っているからこそ、社会はうまくいきます。それに続いて、社会が栄えると、困つたことが起こります。皆が使う富が増えてきたときに、イブン・ハルドゥーンは失われるものが三つあると述べています。」とある。

「一つ目は意志の力(人間が強い意志を持たなくなる。…甘やかされて育つた子どもより、貧乏な子供の方がなにも頑張る。苦勞しないで生活ができること、たまには面白い考えをする人間も出てくるが、平均的にはみんな頑張らなくなる)。二つ目は忍耐力(…今の若者を寮や道場に放り込んで精神を叩き直そうと思つても無理で、彼らはその時だけ辛抱するだけ)。三つ目は「アサビヤ」(「団結心」) (…つまり、お互いが繋がっていて兄弟であるという気持ち、やむを得なければ他の人の犠牲になつてもよいという気持ちのこと。文明が伸びているときにはこれが強いが、駄目になるとなくなる)。「文明の勃興期においては、人間は総じて禁欲的である。贅沢をしない。よく働く」!! 最後に、私からすると、やはり、その3番目の「アサビヤ」(「団結心」)が一番気になるということでもある! <短歌に託して>いつの世も、かくの如し?>

- ・あつちかこつちか 済むのなら 生きるは易し? そうでないのがこの世なり!!
- ・ユーチューブ 学者も素人も おかまいなく? ただ問われるは そのコンテンツ!!
- ・ビットコイン 生みの親の 願ひも他所に? 技術と活用は やはり別!!
- ・「凋落」の原因 ある意味「真理」かも? ただしそれは、善悪ではなく!!
- ・「日本根子彦」 暗示であることは 分かるが その日本とは? (大) 倭と同じや否や? (やまとねこひこ)

<特別コーナー> 堂本彰夫の古代史旅枕(10)</p></div>

○もつ一つの謎(怪?)!! 欠史八代最後の、第9代「開花天皇」! そしてもう一つの怪(謎)は、件の、欠史八代最後の天皇である、第9代「開花天皇 稚日本根子彦大目」である! 彼は、第8代「孝元天皇 大日本根子彦國崇」の第一皇子で、母は皇后で、尊色雄命(穗積臣雄雄)の妹の「尊色謎命」。同母兄弟には、大彦命・少彦男心命・倭迹迹姫命、異母兄弟には、彦太忍信命・武埴安彦命がいるという。

すなわち、彼は、母系的には、後の「物部氏」とつながり、そこから「阿倍氏」「五百備氏」、そして、異母兄弟としての「武内宿禰諸族(蘇我氏)」「和珥氏」とつながりもいるわけである(あくまでも、その系譜が正しいかどうかであるか?)!! しかも、その異母兄弟の「武埴安彦命」が、実は、件の「大幡主命(大若子命)」でもあるということになるわけである!! 何という複雑(怪)げ?!! な人物(天皇)なのであろうか?

ちなみに、父の孝元天皇は、第7代孝靈天皇(大日本根子彦大瓊)の皇子で、母は皇后で、磯城眞主(または十市眞主 大目の娘の細媛命)。同母兄弟はいないが、異母兄弟に、倭迹迹日百襲姫命・彦五十狹芹彦命(舎備彦命・稚武彦命)がいるという。しかも、彼は、「神八井耳命(神武の大和の長子とされる)」の後裔(母方)とあり、だとすれば「多氏」とつながり、さらに、異母兄弟としての「五百備氏」ともつながっているわけである!!

なお、和珥氏は、第5代孝昭天皇(觀松彦鳥彥)の皇子・天足彦国押人命の後裔。そして、第6代孝安天皇(日本足彦国押人)は、その孝昭天皇の第一皇子で、母は皇后で、尾張連の祖の瀧津世襲(その妹の世襲足媛)。同母兄が、和珥臣の祖の天足彦国押人命ということになるわけである!!

※以上の系譜は、すべて「ウイキペディア」より。何ともややこしいのであるが(漢字の読みも含めて)、こうした系譜の中で、次の第10代「崇神天皇」が、どこからともなく大和に進出してくるのである!! であれば、この第9代「開花天皇」は、大和ではなく、北部九州にいたのかもしれない? そして、その痕跡は、例の「老松神社」に隠されている(そういうことにもなるわけである!!) (つづく) (堂本)

<編集後記> あと一日で12月! 来年は、辰年で、私達は年男! とは言え、生活自体は何も変わらず!! として、見た目も!! そんなことを思いながらの、今日この頃! 古代史、次からは、いよいよクライマックスに突入かも? (井上/堂本)

「岳陽」と共に

第 17 号

発行日 2023.12. 15
 編集・発行 井上講四/堂本彰夫
 ※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
 Tel:098-963-9282
 E-mail: gakuyou17@outlook.jp

○「最適(解)」と「エビデンス(証拠)」！実際は…!!

先に、かの「最適(解)」に関わって、怪しげな論考を行ったが(第15号)、今回は、それに連動していたトピック(思い?)があったので、そのことを、改めて書いておきたい！それは、今や普通に取り沙汰される「エビデンス(証拠)」ということについてである。

しかるに、ある時期「EBPM(証拠に基づく政策立案)」ということがしきりに唱導され、大学においても、それに基づく多様なエビデンス(証拠)づくりが、それこそ堰を切ったように行われ始めたことを覚えているが(現在もそうなっている?)、今、改めて思えば、そうしたことが、真に意味があったのかは、かなり首を傾げざるを得ない!!

と言うのも、それが、いわゆる「実証的(客観的?)」なものとして見えてはいても、それらの多く(否、ほとんど?)は、最終的な政策決定での決め手にはならなかったからである!!要は、その時の「最適(解)」が、必ずしも望む結果を生むとは限らないということである(ただ、その限りにおいては、一応は「最適(解)」とはなっていたとは言える?)!

尤も、そのような作業、スタンスは、全体的な予算のやりくりにおいては、ある意味必要不可欠な手続きとはなるので(誰かの恣意や特定の人物・勢力の独断専行を阻止できるということ)、そのこと自体は進歩であり、決して否定されるべきものではないのかもしれない!!

とは言え、それは、事実上は?、政策決定者(端的には予算をつける側)の、後付け的な(相手に文句を言わせないための?)論拠にはなる?!ただし、それだけで終わるなら、その努力・熱意(期待)は、空しいものともなる?!非情:

○どこへ行く?PTA?そして、他の団体も?

別途でも述べたが(新・教育協働への道17)、その存在自体は、絶対になくならないと思われるPTAで、「ついにここまで来たか?!」と思わせる事件?があった(ネット記事)！それは、ある県の高校教師が、それまで払っていた会費(6年分)の返還を求めて訴訟を起こしたというものであるが、その教師は、原則は任意加入のはずなのに、その意思確認もなく、半ば強制的に会費納入を強いられてきたのは違法で、校長と元PTA会長に、払った分の返還を求めるということであつた。

しかるに、このPTAについては、もうかなり以前からそのあり方が問題視されてきたわけであるが(特に役員選び。かの「正納金問題も?」、それについては、まだまだみなが納得できるような状態とはなっていない!!)そういう中での、しかも教員の方からの異議申し立てというところもあり、この訴訟の顛末が注目されるころであるが、一方では、ある大きな問題提起ともなる!!

すなわち、これまでの、学校を含む地域社会には、こうした、言わば加入が当たり前という形で存在してきた組織・団体が多々あるわけであるが(自治会、老人会、婦人会、青年会、子ども会等)、それらは徐々に変容し、そのほとんどは、その存続さえもが危ぶまれる状態となっているわけである(その加入率が低位となっている!)!

本来そういう運命?のものと言うこともできるが、今、新たに「地域の絆づくり」が叫ばれている!この訴訟が、その動きとどう関わっていくのか?その決着には、こうした文脈が是非加わって欲しいものである!

○「偉大な凡庸」！「後継者問題」の究極の課題?!

今回も、あるネット記事からの借用であるが、面白い箴言(?)に出くわした!「偉大な凡庸」という言い方である!現在放送中のNHK大河ドラマ「どうする?家康」での、ある回の一コマであるが、ある重鎮家臣(本多正信)が、二代目将軍秀忠に放ったものである!かつて私は、学生達(もちろん一部の!)に、「かつこいいサラブレッドより、泥臭い駄馬を目指せ!」というようなことを明(迷?)言していたことを書いたが、この度は、こちらの方が、「より説得力のある」言い回しなのではないか?そう思ったりもしたということである!

「才があるからこそ、秀康さま(長子)を跡取りにせんのでござる!」その点、あなたさまは全てが人並み!」「人並みの者が受け継いでいけるお家こそ、長続き致します。いうなれば、偉大なる凡庸といったところですな!」関ヶ原でも恨みを買っておりません!な、間に合わなかったおかげ!」と、將軍職に弱音を吐く?秀忠に、とくと説き明かす。秀忠は、「確かにそうじゃ。かえって良かったかもしれんな」と笑うのだった…。

実際に、そういうやり取りがあつたのかどうかは分からないが(史実としては疑わしい?)、その言わんとすることが、不思議と共感できるような気がするのである!要は、そういうことであれば、多くの人達(ここでは家臣達!)が、ある意味心配で、「あなた様を多種多様に助けてくれる」(時には吉言を呈してでも?)!そういうことであつたように思うのである!まあ、当人は、いろいろと大変ではあるが(どこかの宰相職のように?)!

本ドラマの作者(演出家の人生(人間)観かもしれないが、現実には、確かにそうである?)と、改めて感じ入るわけであるが、危険な独裁者は論外であるが、孤高の切れ者・実力者、その一代で終わる者(信長/秀吉)ではダメだということでもあろう!!

ということ、これは、ある意味未来永劫?続く、リーダー論議の宿命であり、それは、まさしく「後継者問題」の究極の課題でもある!しかも、これは、何も国政レベルだけの話ではなく、むしろ、どこにでも伏在している問題でもある!政治とは、そして後継者づくりとは、本当に難しいものである!!

○こんな人生もあるのか？何ということだ？！

本当に、驚いた！そして、信じられない！こういうことで、ほぼその人の人生が埋まってしまおう！！そこで、その人の人生時計が止まってしまっている？そういうこととはあり得ない？その人とは、かつての宮崎県の高校球児である！ネット記事には、次のように書かれている！

「61年前の暑い夏。戦後アメリカ統治下の時代、沖縄高校の快拳に人々は沸いた。一方、敗れた宮崎大淀高校のエース三浦健逸の人生は、大きく変わった。世間から『宮崎の恥』と呼ばれ、やがて野球の夢を諦めた。今年、三浦は80歳を目前にして、かつてのライバルたちと再会する旅に出た。沖縄ナインにとってあの試合の意味とは何なのか。そして、共に投げ合ったピッチャー安仁屋宗八に、長年言えなかった言葉を伝える。」

とまあ、これだけでは、彼の人生が、具体的にどのようなものであったのかは分からないであろうが、そこにある人生ドラマは、当時の「本土と沖縄の関係」（思い）がいみじくも投影されており、私には、二重の意味で（元高校球児と県外出身沖縄在住者ということ）、胸を打たれるものがあつた（ラスト・イニング 宮崎 vs 沖縄 初回放送日！ 2023年7月31日「ドキュメント30min」↓高校野球史の伝説が今よみがえる。1962年、沖縄が実力で初の甲子園を決めた一戦。その陰で敗れた宮崎のエースが抱えた葛藤。時を越え再会する球児たち。語り…谷原章介）！

ちなみに、「番組のねらい：『見たいテレビがない』という世代に向けて」、『こんなテレビ見たことがない！』といつてもらうための20分間。これまでの演出・文法・テーマから自由な若手制作者たちが、新しいテレビの形を模索します。」ともある。グッドである！

※なお、当時の、夏の甲子園大会には、宮崎と沖縄の場合は、そのどちらかの勝利高が代表となることになっていた！誠に「狭き門」であつたわけである！そして、それまではすべて宮崎県の代表が、甲子園に行っていたわけである。

○また、こんな人もいる！ユーチューブの思わぬ福音！！

他に書きたいテーマがなかったわけではないが、いつものように、ネット記事を見ていたら、ちよつと気になったものがあつたので、ここで急遽取り上げることにした！

文頭には、「由が湧く三屋敷 2年半伸ばした爪：40代引きこもり男性の苦しみ ずっと自分なりに、もがき続けてきました」とあり、「貧困などで困窮しているのに『男性だから』と手を差しのべてもらえない男性が『弱者男性』と呼ばれている。先行き不安な時代が彼らを社会の隅に追いやったのか？彼らが抱える『生きづらさ』の正体を突き止める。(SP.1)」とある！詳しくは書けないが、現在は、何故か？ユーチューバーとして、注目されているらしい！

しかるに、『YouTubeは収益化できましたが、とても生活できる稼ぎには程遠い。この7年間で人並みの生活はムリだと諦めざるを得なくなりました。せめてこれからは『人ならざる者』として、『社会に敗れた男の姿』を記録に残して、誰かの今後の生き方のヒントになればいいですね』と、本人は語っているという！これも一つの人生ドラマ！！

〈短歌に託して今年も少なし〜様々な人生見違へ〜〉

・何のための エビデンス（証拠）？

ただ捨て去られては 悔しさのみ！！

・PTA 良かれと思われ 生まれしも

世が移ろえば 厄介者！！

・偉大なる凡庸？ 言い得て妙なり！

ただし当人は それどころではなく！！

・こんな人も いるのかと

同じ球児として 複雑 否 恥ずかしい？

・40代引きこもり！ 弱者男性？

それを逆手に 生きれば それもよし！

〈特別コーナー〜堂本彰夫の古代史旅枕⑩〉

○改めて、倭国大乱と「大幡主命」／「開花天皇」の関わりは？

さて、改めて、こうしてみると、3世紀後半頃に、『崇神天皇』を中心にして、近畿・大和に、新しい勢力・王権が出来ることになるわけであるが（＝輪山麓の畿内参政都市の出現 磯城地方の隆盛、一方の北部九州には、その時期においても、倭国／邪馬台国連合はあつた 残っていた！266年の「西」晋への遣使は、その倭国／邪馬台国連合のものであることは確か！「百耳」が女王を継いでいる！）そして、その二世代前は、『卑弥呼』はもちろん崇神の父親の『開花天皇』の時代ということにもなるわけである！！

であれば、それらの時代全体の史実解明の視点は、その前提としての、『倭奴国』を中心としていた、まさに「旧 倭国」の解体 変質がそれか、かの『倭国大乱』と呼ばれるものであつた！が、一方では、近畿・大和における新たな勢力の出来・結集、他方では、残された北部九州の、その後の新たな展開を生んだということである！おそろくそれらが、孝元・開花・崇神・垂仁・皇行・成務、さらには仲哀・神功皇后・武内宿禰、そして応神・仁徳等に示される一連の状況であつたということである！！

要は、それらは、連環的、したがって同時進行的に進んでいたものというところであるが、別言すれば、関わりのある同じ部族・勢力によって進められたのではないかということである？例えば、「和珥族」、「鴨族」、「物部族」（尾張氏や海部氏を含む）とかである！そしてそこに、神功皇后・武内宿禰（諸族、さらには応神・仁徳等の新しい勢力（外要素か）が入り込んできた！）という中で、北部九州が二つに割れ、その中の一方の部族・勢力が近畿・大和へ移動し（吉備と出雲を抱き込んで）、他方では、新たな勢力の参入による『新倭国？』の誕生という形となつたということである！！

ただし、その後者には、近畿・大和への集結に関わつていた一部の勢力が、再び関わっているのではないか？それが、神武の、大和での長子とされる『神八井耳命』の後裔である『多氏』である（彼らは、『火肥君』、『阿蘇君』、『大分君』等となつていった！）！！こうなると、そこには、新たな史実の解明が必要となつてくる！そして、その大きなリングが『大幡主命』と『開花天皇』の関係と睨んでいるのであるが…！！（つづく）（堂本）

〈編集後記〉改めて、いろんな人生ドラマがあるものである！古代においても然りであろう！！しかし、後者はまだ、その舞台装置さえもが見えてこない！！とにかく真実を知りたい！！（井上／堂本）

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 18 号

発行日
2023.12. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○今年の「師走」は、「師を想う」ものとも?!

「師走」とは、陰暦12月のことであるが(ただし、現在でも使われている)、その年の最後の月ということである!
「師(お坊さん?)が走る(忙しい?)」という意味と理解していたが(実際は俗説のようでもある)、とにかく一年の締めくくり!寒さも手伝って、世間がせわしく動いている?そんな情景である!それは、今でも変わらない!!
尤も、暖かい、しかものおんぴりとした?ここ沖繩に長らく住んでいる私にしてみれば、そうした冬の情景(心象)はまったく無縁なのではあるが、年の瀬ともなると、やはり、「この「師走」という言葉が頭を擡げてくるわけである!」そんな中、福岡のM先生の訃報に出くわした(13日)!
それは、偶々電話したS県のHさんからであったが、亡くなられたのは先月の8日であったらしい(原稿校正を終わらされた直後の?「孤独死」であったそうである!)。「M先生らしい?」と言えは、故人に申し訳ないが、信じられないくらい沢山の支持者(信奉者?)がいた中で、分かる人には分かっていたであろうが、ある意味では「孤高の人」であった(少なくとも、私にはそのように見えていた!)!!
近年は、尊顔を拝することもなかった(事情があつてその機会を自ら作り出していなかった!)、それはそれで仕方がないが、ある一時期までは、私の「心の師」(否、畏敬する「疾駆(きやく)る人」?)であったことは間違いない!また一人偉大な先輩が逝かれたわけであるが、とにかく、お疲れ様でした!そして、ありがとう!ございました!
ということ、今年、このような年の瀬となっているが、「師」を想う「師走」ともなっているわけである!!

○さりげない告発者!だが、優しい伴走者でも?!

突然、そして無理矢理?上の記事と連動させることになるが、今年の、著名人の「墓碑銘」的な記事が、今朝の新聞(22日)に載っていた。「ああ、こういう人達が逝かれたのだなあ!」と、改めて知らされたわけであるが、ここで記しておきたいのは、その中の一人、脚本家の山田太一さんのことである!と言うのも、先日、彼の作品を観て、そして、「追悼」亡くなられた山田太一さんをしのんで『チロルの挽歌』をNEWSにて放送!というネット記事を読んでいたからである。

私には、他に「岸辺のアルバム」や「男たちの旅路」といった作品が思い起こされるのであるが、そのネット記事には、「若い世代から老人まで、さまざまな世代の人物を登場させることが多い。その点は『前世代があつて、良くも悪くも次世代があるわけで、まったく切り離されて、ある世代が存在しているわけでもないから』とあつた!そこに私は心を惹かれるわけでもあるが、それは、ある意味では、時代の「さりげない『告発者』!だが、優しい『伴走者』でも!」ということである!!だから、どの作品も、最後は、Happy endであつた!!

ちなみに、同ドラマは、「二人の男と一人の女が北海道で再会し、どんな生き方を選びどんな生き方に挽歌をうたわざるを得なかったのか?人間模様と、時代の変わり目を迎えた街の姿、過去にそれぞれ関係があつた二人の男と一人の女が北海道で再会...テーマパーク建設のため過去の三角関係を水に流し、新しい夢に向かって力を合わせる」という熱き友情のドラマ...とある!

○最初に出会った若者達!今は、50過ぎの壮年となり!

さて、もうかなり日数が経ったが、過日(6日)、大変嬉しい時間をもった!それは、私が、琉球大学赴任後最初に出会った(所謂「学生チューター」として)学生達との、久しぶりの忘年会(飲み会)であつたが、この間の「コロナ禍」もあつて、人数的にも、一番多いものであつた(県外一人は「100参加と、事情があつて顔を見せない2人を除いて、そして、残念ながら、既に物故している3人もいる!」!ということ)、私の周りは、総勢9人の、元若者達がいたわけであるが、今は、50過ぎ(52歳前後)の壮年達であつた!

しかるに、思い出せば、確かこの元若者達からであつたと思うが、11年前の「還暦」のお祝いでもらつた時の「泡盛の古酒(クース)」が、何故かまだ我が家にある!!ただし、最終確認はしていないので何とも言えないが(この間、何度かは蓋を開け、時々来訪者と飲んだことはあるが、少しは継ぎ足しもしているので、まだ残つてはいると思う?)
とここで、一昨日(20日)、忘れかけていた?ある賞のことが、思いもかけない人物(ここでは「お馴染み」の?O県のS君!こちらも、学年は違うが、一応は?教え子!)から知らされたのだが、実は、年明け2月の17日に、その「古酒(クース)」にかこつけて、我が家に集まることになつていたので、場合によつては、「サブライズ古酒(クース)」に出来るかもしれない!!そうも、思っているわけである!

なお、ここに言う「ある賞」については、もちろん嬉しいものではあるが(そして、我が奥さんのことを思うと?)、ある一人の人間(現県教委スタッフ/彼もまた元琉大生)の思いの賜物であることは、ここに敢えて書き記しておきたい!詳しくは書けないが、私の功績?を本気で認め、そして動いてくれたことが何より嬉しい!と言うよりは、その思いには応えなければ!ということでの代物である!
そんなことを思いながら、今これを書いているわけであるが、改めて卒業生達との出会い・再会は、掛け値なしに嬉しいものである!まだまだその機会はある!!(井上)

○エジプトの動き(思い)ー複雑ではあるが…

これもまた、過日(8日)、ある意味では考えられない？かのエジプトとつながったズーム交流を行った(沖縄3カ所、エジプト5カ所？を結んだ)！10月の26〜27日において、那覇市(県生涯学習推進センター&豊多川公民館十公設市場)で行動を共にした人々とのそれであったが、話題は、別途作成している「新・教育協働への道」(16)で紹介している、彼らのプロジェクト、エジプトの大学(正確には大学院？)での社会教育主事(に相当する？専門家・養成(ディプロマ付与)のこと)についてであった！もちろん、それについては、ある意味大先輩？である私(ここでは堂本であるが！)であるので、可能な限り支援(アドバイス？)をしたかったのであるが、言葉の問題はともかく、やはりその背景にあるものの違いもあり(大学の組織&日本で言う教育行政のしくみ等、どのような貢献が出来るのかは、かなり？であったように思う)！要は、彼らが、私(達)に求めているものは、ただ一つ！養成課程での実践的な学修のプログラム、その履修プランのことであったということであるが、私からすれば、それだけなの？とも思うが、彼らには、彼らなりの事情と意思があるのである？それが、いわゆる「教育借用」というものではある？ただし、心配ではある？！

○何とも悩ましい「祭神」の乱立、否、滅裂？！

何度も書くようで申し訳ないが、最近、古代史に関するブログやYouTubeを沢山見ている！そして、様々な有用な情報を得ている！ひよっとしたら、このようなところから、真相解明の突破口が開き始めるかもしれない？そんなことさえ思う次第であるが、だが、ここに来て、何とも悩ましい問題も感じ始めている！それは、ここに出てくる「神」のことであるが、その名前、そして、鎮座場所！！一言でいえば、「乱立、否、滅裂？」ということでもあるが(使用字や読みの問題も、もちろんある！そしてそれが多くの人を遠ざけている？)、そこには、明らかに社名や祭神名の変更、すり替えや秘匿があるということでもある！！実は、その原因を探し出していくことが、他ならぬ「古代史解明」の一助ともなるわけであるが、そんな中、例祭等を実施し、敬虔に、その「神」を祀っている人々がいる！他方、私を含めて、普通の人々は、結婚式や初詣、他の区切りの行事(七五三等)等で、お世話になるだけである！！

〈短歌に託して師走！こうして今年も過ぎていく！〉

・疾駆く人 師と仰ぐは 少し変？

ただ見せられし姿 しかと収むる！

・さりげない 時代の告発者？

だがすべての世代に 優しき伴走者でも？！

・50過ぎの壮年達 人となりは 変わらじも

見た目は それとは裏腹に？！

・エジプトよ いいところ取りは ほどほどに！

同じ過ち？ 決して繰り返すまじ！

・古人よ 何故に設けし 神の社！

名前は滅裂？ そこに何ある？

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕(8)〈

○「大幡主命」が「旧倭国」、「開花天皇」が「新倭国」？！

そこで、ここでは大変な妄想となるかもしれないが(だが真実？)、思い切つて、かの「大幡主命」が「旧倭国」、「開花天皇」が「新倭国」の勢力というように捉えてみると、どのようなものか？そこについて、少し考えてみたい！なお、前者は、博多湾沿岸(中心地は須玖岡本？)に覇を有していた「鵜族」、後者は、背振山南麓↓「高良大社周辺」に集結していた新興勢力(天伽耶多羅勢力+狗奴国)「鵜族+神功皇后・息長氏+武内宿禰諸族」であった？ただし、その後者の勢力については、もう少し複雑な様相があったと思われる(↓とりわけ、そこにおける「酒君氏の存在」)！！

とは言え、そこら辺りの言及は、今後のさらなる課題ということであらう(課題ではあるが！)、ここにおいては、取り敢えず、博多湾沿岸部の「旧倭国」の中心勢力(全盛)が、その内陸部、視点を変えれば有明海沿岸部の新興勢力に追いやられ「鴨族」とともに東へ移動？いずれも「海神族」？、それが引き金(「源流」)となって、西日本全体の諸部族・勢力の大々的な攻防、すなわち「倭国大乱」と呼ばれるものになっていった？！

そして、その過程において、北部九州では、「魏志」に言う「邪馬台国」の出現、親魏倭王「卑弥呼」の登場、さらには「彦与(古志)」への継承がなされるわけであるが、その後の顛末(新倭国「邪馬台国」連合の解体)については、ほとんど闇の中(「世紀末まで」という扱配なのである！要は、そのことについては、例の「記紀」は何も記していない！と言ふよりは、かの「神話」として、その顛末を暗示させている？そういうことである？！

いずれにしても、そういう中で、現在も、「大幡主(天誓)命/建瓏安彦」そして、「開化天皇(高良大神)」を祀る神社や、彼らに纏わる伝承が、そこ北部九州に色濃くある！このことは事実であり、ここではっきりとしていることは、ある時期から北部九州(倭国)が二つに分かれ、その二つの勢力が、北部九州と近畿(天和・河内)双方を舞台として、その後の「倭国」↓「日本国」を形づくっていった？！少なくとも、そのことだけは言える！(堂本)

〈編集後記〉ということですが、今年、これで終わりである！来る「辰年」はいかなる年となるのか？一応は、7回目？の「年男」ではあるが、これまで同様の日々が続く？！ただ、かの心配(憤り？)は、決して同様であつて欲しくない！(井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 19 号

発行日
2024.1.15
編集・発行
井上講四/堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○新年に想つー「辰年」、そして、「年男」でもある！

年が明けて、既に5日！私自身には、いつもと変わらぬ年始なのであるが、実は、今年も、干支は「辰」。だから、「一応は「年男」(7度目)なのである！そこで、何か奮奮できるものはないか？そのようにも思ってはみるが、なかなかその材料が見当たらない？でも、何とかしたい！否、そうしなければ、さらなる老境へとまっしぐら!!

そんな想いのスタートであったが、一方では、そのような高齢者の戯言？を、のつけから、しかも一瞬のうちに打ち砕いたのが、元日の「能登半島地震」(その後も続いており、被害は甚大なものとなっている！)、そして、2日の日航機と海上保安庁機との「衝突事故」である！どうしてこんな日に、こんなことが起きて起きるのか(不測の自然災害&人為的なミス？)とは言え、およそ考えられないような事故!! 命をなくした方、被害に遭われた方々には、本当に何を言っているのか？言葉にするにも憚れるが、一日も早い復興(地震災害の方は、まだまだ厳しそうであるが！)、そして、心の傷を癒されることを祈るばかりである！目を転じれば、相変わらずの、諸外国の悲惨(ウクライナ、パレスチナ、ガザ地区等)も続いている！他方では、そうした悲報とは真逆の？、どうしようもない(情けない?)話(政治家のキックバック事件等)も続いている！

いずれにしても、すべての人に「新年」は訪れている！人の世のはかなさを挙げればきりがないのであるが、生きている限り、その「生きる意味」を求めて(探して!)生きる他ない！それは、「年男」であろうが、「高齢者」であろうが、一切関係ない！そう思つて、歩むしかない！

○娘達(次女・三女)、そして卒業生達との出会い！

上記の痛ましい災害・事故のこともあるので、あまり個人的なこととは書きたくないものであるが、このことは是非書き記しておきたい(私の、この通信への思いを分かっていたらいて方には、多分分かってもらえる?)！
ということ、まずは、正月休み(短い日数であったが!)に、福岡と岡山に住む次女、三女が、我が家に帰ってきた！二人とも独身であり(年齢は不問とするが!)、いつもながら、幼少期の親子関係を、可能な限り取り戻そうとするような言動をしている私であるが(神社参りの際の綿菓子購入等)、いつまでこのような光景を見られるのか？何とも複雑な思いの昨今ではある！

次が、最後のゼミ生3人(T君/O君/Mさん)の、年始訪問(2日)であるが、この学年の若者達には、何度も書いてきたが、私は、大いに救われた！やけになつて大学を辞めた私であったが(それ故に、彼らには大いに迷惑と心配をかけた!)、その後も変わらぬ思いを持ち続けてくれているようで、事あるごとに、私の家に顔を見せ続けてくれている！本当に、ありがたいものである！

これも、かの「教師冥利」ということであるが、こうした関係がいつまで続くか(賀状も含めて)? 独身の間は、それなりに続くであろうが、所帯を持ったら(少々古い表現か?)、そうもいかない(ただし、T君は所帯持ち！子どもも二人いる!)!!彼らを通じた、他の卒業生達の近況も知れるというおまけ?もある！ついにながら、年明け直ぐに(午前零時)、「あけおめ」の電話をする、一つ上の卒業生(S君)もいる(今年もあつた!)!

○今更ながら、「七十歳」にして「矩を踰えず」!!

これは、古代中国の経書である「論語」を元にした故事成語であるが、恥ずかしながら、否、迂闊にも、その故事成語自体の存在を失念していた！「五十にして天命を知る」や「六十にして耳順う」は、それなりに覚えていて、使つたりもしてきたのであるが、自らが、その年を迎え、そして超えた今も、ついぞ思い出すことはなかったわけである！

しかし、それが、何と昨日(9日)、偶然にも出くわしてしまつた！しかも、それは、いつのまにか、ネット上で、ある種のルーティンワーク化している「難読漢字」の読みの問題から、それに行き着いた次第なのである！そのルーティンワーク自体は、一種のボケ防止のために行っているつもりであるが、改めて、漢字の世界の広さ(奥深さ)を知らされる時でもあるということがある(初めて見る字も多く、情けなくなる場合もあるが!)!

そこでここでは、折角でもあるので、この「七十にして矩を踰えず」の意味を確認しておくことにしたい！そして、果たしてそれに見合う生き方を、今の私がしているのかどうかを、自己評価してみたい！ちなみに「矩を踰えず」とは、『道徳や規律から外れる』『分を越えた振る舞いをする』という意味で、どんなに立派な人でも自分の行動を完全にコントロールできるようになるのは七十歳くらいになってから!ということらしい(確かにそうだが、それにそぐわない人もいる?)!

それはともかく、今の私は、そのような生き様とはなつていないと思われ(最早「矩を踰えず」ような生活環境にはない!)、一応やれやれではある!!ただし、「いくつになつても成長できると信じつつ」生きられれば、それはそれで、さらに結構なことかと思われ(ただし、論語では八十以上はない!!)!

余計なことではあるが、この孔子の言葉については、前にも述べたかもしれないが、丁度50歳を迎える頃に読んだ、井上靖の『孔子』(1989年の第42回野間文芸賞受賞作)のことが、改めて思い出される！「五十にして天命を知る」の「天命」のことであるが、何故か、その小説を読んで、大いに納得させられたことを覚えている(多少?通説とは違つた?)!

(井上)

○3月16日(土)、いかなる「出会い」となるか?!

ひよんなことから、以前から実現させてみたいと思っ
ていた交流が出来そうである(3月16日(土)午前。形
は、「インタビュ・フォーラム」という名のズーム交流。
だし、タイトルは未定！それは、今、沖繩で頑張っ
ている4人の、NPO法人・一般社団法人の職員(MJさん・
MSさん)公民館受託者/MHさん・Yさん)青少年の家・児
童館受託者)と、長野県泰阜^{やまが}村で、NPO法人グ
リーンウッド自然体験教育センターを運営しているTさ
ん(代表理事)とのコラボ交流である！

願いは、長野のTさん(達)がやってきたこと(ひと
づくりとまらづくりの循環の究極体現)を参加者全員で共
有し(学び)、それを踏まえて、参加者全員の思いと力の
結集(仲間づくり・後継者づくり)を、改めて行っ
てほしいということである(であれば、タイトルは、「ひとづ
くりとまらづくりの循環」そこには、何が必要なのか?インタビ
ュ・フォーラム…「人」と「思い」の結集!とでもなるか?)!!
現役を退き、ほとんど公的な関わりを辞してきた私
であるが、この間唯一の、玉城青少年の家の、自称?「相
談役」をやりながら痛感したことは、「教育協働」(「学校
教育」と「社会教育」の協働)を実現するためには、彼ら
のような、傑出した思いと力のある、そして、それを「持
続的に」行うことが出来る「人達(地域や学校、行政を動か
していくプロモーター的人物?)が必要だということであ
る(現実には厳しいが！それ故に、応援したいのである)!!

今回の面々は、これまで私が出会ってきた関係者の中
で(教員や行政以外)、その思いと行動力(企画力も含めて)が
抜きん出ていて、関係者の、新たな模範(先行く人?)と
なり得ると評価している人達であり(ある種の役割変換
！それは、人事異動のある公務員には限界がある)、世代的
にも、そのことが期待出来る人達である(50過ぎと40
過ぎの各一人！二層の働き盛り?そこが、ある意味ミソ?)!
ただし、こうしたお節介?は、これが最後とはなる?!

○すべて、「教育」の結果である?!

ところで、こんなことを、今更書いても仕方がない(無
力を感じる?)が、自然災害や、やむにやまれぬ事情でのそ
れはともかく、多くの犯罪や悪事は、究極のところ、その
人間の弱さや欲得の為せる業であることは言うまでもな
い!どうしてそんな人間が出てくるのか?親や生育環境
(家庭や地域社会、学校等)に因を帰することも出来ようが、
要は、人の命を奪ったり、迷惑をかけたたりすることは、絶
対に許されないという倫理が育っていない?あるいは、そ
れを、いつのまにか無くしている(それが大きい?)!

だから、「教育」は、個々人の「人格の完成」と「社会
の良き形成」を目指すものとされるが、いつの世も、これ
が実現されることはない!!だが、それが分かっている、
やはりそのことを謳っていく他ない!そんな無常さや感
じるのであるが、それを、多くの人が放棄してしまつたら、
それこそカオスである!だから、たとえ無力であつたとし
ても、それを実現しようとするのが重要なのである!
〈短歌に託して〉いかなるスタートであらうとも!〜

- ・いかなるスタートで あらうとも
そこからは始めるしか ないのである!!
- ・父親としての想い そして教師冥利
続く限りは持ち続けたい 感じていたい!
- ・「古希」にだけ目を向け
そこにある「矩のを躰えず」を 失念す!
- ・最後の期待? とは言えそれは こちらの勝手?
でもふつけてみたい 彼らには!!
- ・弱さや欲得 誰もがもつ
その先導うは 何の所為? そこに「人」あり!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史探枕⑩

○「倭国大乱」は、「鰐族」と「鴨族」の移動(逃亡?)から!!
では、改めて、その二つの勢力とは、具体的にはどのような勢力なのか?
そこでここでは、かの「神武東征」のことを、少し冷静に捉えてみたい!
何故なら、それは、時代的には、先導でも述べたように、かの「倭国大乱」
前後の話であるからであり、その動き(東征)は、それに伴う、ある勢力(お
そらく「鰐族」と「鴨族」!いずれも「海神族」!)の東への移動(逃亡?)を示
すものと考えられるからである(ただし、物語自体は創作?)!!

すなわち、北部九州における自らの立場の悪化(覇権の危機?)によつて
東に移動した「鰐族」と「鴨族」(奴国及び一部の伊都国の王族達?)の主流
は、まずは吉備に逗留し、足守川流域に「吉備王国」を立てた(権勢遺跡
「大和」へ集結していった(纏向遺跡)!!

前者が、「前方後方墳勢力」、後者が、「前方後山墳勢力」となっていくわ
けであるが、徐々に後者が優勢となり、前者の勢力は、北陸・東海、関東
方面、そして、一方では、西に向かつて、九州方面へと移動(帰郷?)してい
った(それらが、後に「多氏」と呼ばれるものであるが、彼らは、神武の大和での長
子「神八井耳命」の後裔という位置づけであった)!

ただし、ここでの問題は、西へ向かった(帰郷?)していった「多氏」が、
新倭国(邪馬台国連合)の樹立に、どのように関係していったかである!!最
初の建国(卑弥呼の共立)に関係していたのか?それとも、卑弥呼の死後
の「吉野」の擁立に関係していったのか?そういうことであるが、そのど
ちらかに関わっていることは間違いない(阿蘇の君、火の君、大分の君等)!!

ということで、それに関わるもう一つの問題は、中南部九州に盤踞してい
た「卑人」熊襲族と、彼らが、どのように関わっていたかである!!これが
分かれれば、複雑怪奇な「背振山系周辺」と「高良大社周辺」の状況が、さら
に理解できるようになる!!それについては、次号で。(つづく)(堂本)
〈編集後記〉こうして新年が始まったが、寒さの方は改めてこれ
から?とにかく早く春が来ないかと、めっきり体温調節機能が低
下している、そして、昨日(12日)からは、久しぶりの大きな○
○腰に見舞われている7度目の年男(達)である!(井上)堂本

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 20 号

発行日 2024.1.30
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakuyou17@outlook.jp

〇二月、三月には、それぞれ県外へ！楽しみである！

今年も、いつものように、早一月が過ぎようとしている！こんな書き出しで、新たな年の経過を記すのは、甚だ恥ずかしい（情けない？）しかも、久しぶりの大きなギックリ腰も伴って！のであるが、これもまた、今の私の偽らざる日常でもあるので、何とも甘受するほかない！！

とは言え、来月、そして再来月は、少しは違った日常？を迎えることが出来そうである！そうなのである！二月は東京へ、そして三月は、鹿児島への旅が待っているのである！前者は、以前に、少しだけ触れていたが、ある賞の授賞式への参列という大義名分を伴う旅であるが（実は、我が奥さんに喜んでもらうためである？）、そこでは、東京在住の、大学時代からの友人であるF夫妻との再会を果たすためである（彼らとの、房総への温泉旅行もある！）！

後者は、最近何度もお世話になっている、岡山県倉敷市在のS君（某大学の教授／教え子のつもり？）の研究（事例調査のお手伝いという）こと、今回は、彼の実家でもある鹿児島県鹿屋市の学校を訪問することになっているのである！なお、そこでは、同じ学年の卒業生T君（鹿児島在）とI君（宮崎県在）に会えることにもなっている！再会を果たすことが出来れば、さらに嬉しいものとなる！

ということ、これから先、そのような旅や出会いが、いつまでも出来るわけではないので（つくづくそう思う！）、行ける時には、可能な限りそうすることになっている私であるが（ただし、その準備等は、ほとんど我が奥さんがしてくれている！）、それがまた、私の貴重な（自分勝手な？）歴史（自分史）づくりになることは言うまでもない！！

〇学会も、こんな形なら、今少し続けられるかも！！

先日（16日）、現在も、辛うじて唯一会員を続けてい「生涯教育学会」の関わりで、ズームによる研究会に参加した。もう会員としての参加はいい（卒業？）と、ここ数年来思っている私であるが、こんな形の学会参加なら、もう少し続けられる（否、続けてもいいかなあ）と思わせるものもあつた（こんな時代になろうとは？）！

ここでは、その日のテーマ・内容については、特に示さないが、毎回貴重な資料（情報）を得ることも出来る！もうほとんど研究者的な努力もしていない（意欲もない？）私にとつては、甚だ貴重な機会ともなっているわけである！しかも、今回は、発表者の配慮？で、参加者との質疑応答の時間が多く取られ、ただ聞くだけと思っていた私も、ついつい発言してしまつた次第である（やはり、根っからの「喋り好き」※我が奥さん評！実際は、そういうことではないのであるが？）な私なのである！！

折角ではあるので、これについて少し敷衍して言えば、「学会」というものは、その分野・研究対象における「真理の探究」を目指す、当該集団の「結集の場」であるが、実際には、なかなかその実感が得られないものである（「年報」の発刊や、当日のシンポジウム、個々の研究発表における質疑応答の時間等は設けられているが！）！！

要は、会員各目の興味・関心、そして「意欲」（いろんな意味がある！）によつて、その意義が担保されているわけであるが、特に、その「意欲」が減退している（それを必要とされない？）者にとつては、なかなかそこへ足を運ぶ気力（財力も？）が湧かないということである！！

〇大きな、そして強固な集団が、相次いで瓦解している！！

ところで、ここでは、こうした話題・テーマ（芸能界に関するもの）は、出来れば採り上げたくないものであるが（単なるスキャンダル話となる？）、昨年は（旧）ジャニーズ事務所、宝塚歌劇団で大きな問題が表面化し、そして今度は吉本興業が、世間の注目を浴びている！タレントや芸人が作り出す、言わば「虚構（虚飾？）の世界」とは言え、その存在の大きさと、それが与える社会的な影響は、たとえそれらがマスコミ等によつて喧伝させられているものであつても、今や計り知れないものとなつてい！まさに、巨大産業化しているということである！

もちろん、ここでは、そういうことに関する具体的な事実を云々するわけではないが（出来ないし、したくもないが！）、ここで書いておきたいことは、あんなに大きな、そして強固な集団（組織）が、見る間に瓦解していつていることに（特に、あの華やかなジャニーズ事務所）、驚きとともに、何か、時代の大きな転換点を予感（実感？）させるものになつてきているということである！！

しかも、こうした芸能界の話で終わるのではなく、これも、あまり書きたくはないが、その後の、政治の世界の、いわゆる「ギックバック」事件に端を発する、某最強政党の激変（↓派閥解体？）も、ある意味、同じような現象として捉えることが出来るといふことである！端的に言えば、すべて、「奢れるもの久しからず」といふことであるが、問題は、今現在の大きな力（組織／個人も？）が、その存在意義や、彼らが有している人間関係や力関係（主として財力による！）が徐々に変質し（ある意味必要とされていない？）、次なるパワーや社会勢力が求め始められているといふことではないか？そういうことである！！

それが、ある種の「時代の相転移（臨界現象）」なのかどうかは分からないが、少なくともスター（否、ヒーローかな？）やタレントのあり方が問い直されていることだけは確かであろう！！そして、ここでは、奢り・強権／虚飾・虚勢は、全く不必要だといふことである！！（井上）

○「盛者必衰の理」！誰が、何故、書いたのか？

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつひにはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

周知のように、右は、かの有名な『平家物語』の冒頭部分であるが（初めてそれを見た！あまりにも有名過ぎて、直接全部見るとはなかった！つまり、そのエッセンスだけを、勝手に理解していたということである？）、表の井上氏の記事内容に関わって、少しここでも、何か感じ入ったことを書いておきたいということ、取り出してきたということである！ちなみに、『平家物語』は、鎌倉時代に成立したとされ、平家の栄華と没落、武士階級の台頭などが描かれているものである（ネット情報より）。

ところで、この物語は、作者不詳（藤原支族の末裔とも）の軍記物語（冒頭の「琵琶法師による語り」とされているが、私には、この作者の胸中（目録）が、何故か、一番気になる！というか、何故このような物語（テーマ）を書いたのか？そこが知りたいということである！余談だが、かの「鴨長明」（鴨氏／賀茂原王氏の末裔）も、このような「諸行無常？」を説いていた『方丈記』！

要は、そういうことを、思うことはあっても、敢えて言葉・物語にして書くということに、どのような意味があるのかということであるが、ある意味では、敗者あるいは諦観者／遁世者としての捨て台詞（一面では、ある種の「矜持」あるいは「さま～見ろー」感？）なのではないかということである（それが、文学ともなる？）！！

もちろん、そこに、「世の警鐘」と言う意味もないわけではないが、私には、どうも、そちらの方の解釈がピンとくるし（自己投影？）、そうであるからこそ、そこにある、生身の人間の「切なさを」（どうしようもないではないか！）感が、とても共感できるということである！！

○画期（革命？）的な論証結果であるにも拘らず…！！

昨日（20日）、例によって、古代史関係の動画を漁っていると、画期（革命？）的な論証結果であると言える（否、断言できる！）動画を発見してしまった！改めて、それに関わる情報をネットで調べてみると、その論証結果は、既に2020年9月には世に出されていたようである！にも拘らず、現在においても、かの「邪馬台国所在地論争（事実上は、「北部九州か近畿大和か」の二者択一論争）」は続いている！一体、どうしてなのか（何か作為でもあるのか？）？

詳しいことは書けないが、その論証者「関川尚功氏」によれば、書名からも分かるように『考古学から見た邪馬台国大和説 畿内ではありえぬ邪馬台国』梓書院、考古学的見地からは、3世紀（邪馬台国／卑弥呼時代）の大和（纏向遺跡）は、『魏志』に示されているような痕跡はないということである！それを受けた、新たな展開・論争が望まれるわけであるが、その動きがない？改めて、それは何故なのか？

＜短歌に託してやはり世界は変わっている！＞

・たとえ国内でも、行かれるうちは
すべて行こう！
それが我が歴史となる！

・学会も
ズーム使えば
またまたよし！

いずれにしても
こんな時代が来ようとは！

・あんな組織が
壊れるなんて！
やはりそれは
時代の大転換なのか！！

・“盛者必衰”？
そんなことは分かっている！
問題は
何故それを語るかである！！

・本質は
あつちかこつちかではない！
いかなる史実が
そこにあったかである！

＜特別コーナー＞堂本彰夫の古代史旅枕②③

○「大幡主命」と「開化天皇」は、「新旧倭国勢力」（「二極体制」）の生みの親？でも、何故か双方は隠されてもいる！！
というところで、ここでは、後漢から「倭（倭国）」とされてきた「奴（邪）国王」（倭）が、何らかの事情で（最後は覇権の危機？）、2世紀後半から各地に移動し（それに伴う騒乱が、いわゆる「倭国大乱」と呼ばれるもの）、その彼らの東への移動（上宮備→山陽→近江→大和）が、「神武東征」という物語に投影（大脚色？）されているのではないかとということであるが、冷静に見れば、そこには、北部九州で、「奴（邪）国王」（倭）を追いやった「新（倭）国勢力」と、東へ移動（大和に集結）した「旧（倭）国勢力」の「二極体制」が出来上がっていたのではないかとということもある！ただし、

もちろん、「記紀」は、大和に集結した「旧（倭）国勢力」の方から見た建国史を描いている！そうしなければ、自らが創出した「万系一世」の物語が崩れる（史実がバレる）！そういうことである！！
であれば、ここでの「大幡主命」や「開化天皇」の話は、そうしたいわば「新旧倭国勢力」による「二極体制」に絡んだものとなるので、そのような視点での史実説明が求められるわけであるが、実は、そのこと自体が、「記紀」では隠されている。否、話が歪曲ないし捏造されている！すなわち、「大幡主命」は「旧（倭）国勢力」、 「開化天皇」は「新（倭）国勢力」の代表（リーダー）ということであるが、両者は、共にその素性等が隠され（別な新たな勢力の出現！本神または継体天皇を擁した勢力？）、その出身地（活躍の場所）である北部九州での痕跡が、ほとんど消されてしまっているということである（しかも「大幡主」／「本君子命」のことは、むしろ近畿にて多田！）！！

だが、その名残（分かる人には分かる）は、前者であれば「櫛田神社」、後者であれば「老松神社」というような形で（もちろん名称や祭神等の改変がなされている）、今なお存続させられている！したがって、問題は、何故そのようなことになっているのかであるが、裏を返せば、そこに真実を見つけない材料が横たわっているということにもなる！！（つづく）
（堂本）

＜編集後記＞年始早々の大災害や事故のことも、人の世の常で、徐々に遠ざかっているように見えるが（だが、能登半島地震だけはそうではない）、私（達）は、そのことを傍目に、いつものような日々を送っている！そして、無理矢理ではあるが、数少ない楽しみを心待ちにもしている！多分？これで良いのだ？（井上／堂本）

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 21 号

発行日 2024. 2. 15
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakyuou17@outlook.jp

○若干気恥ずかしいが、これは私達の「東京物語」!!

この2月の8日から13日の間、私は、我が奥さんと一緒に東京に出かけていた!大義名分は、既にここでも記していたので繰り返しはしないが、私達夫婦には(特に私にとっては何?、一つの大きな想いをもった旅であったことは間違いない!そして、それは、言うなれば、私達にとつての「東京物語」と言えるのかもしれない!!そんな大それたと言われるかもしれないが、そして、かの有名な映画(小津安二郎監督作品)とは、まったくもってストーリーも違うので、響きものであることは言うまでもないが、少なくとも私は、そのように名付けたいということである!

ちなみに、その映画「東京物語」について、ネット情報では、「昭和28年度文化庁芸術祭参加作品。上京した年老いた両親とその家族たちの姿を通して、家族の絆、親と子、老いと死、人間の一生、それらを冷徹な視線で描いた作品である。…家族という共同体が年を経るとともにバラバラになっていく現実を、独特の落ち着いた雰囲気ではつづっている。」とある。(ウィキペディアより)

単に、私達老夫婦が(映画よりは遙かに若い?、ある意味これが最後となる)と思っている(あくまでも思っているのだが!)、東京行きを、かの有名な小津作品の一つである「東京物語」に被せるなんて、飛んでもない不逞であるが(笠智衆や原節子ファンには大変恐縮でもあるが!)、「東京」は、私達に大きな転機を与えてくれた場所(生活は苦しかったが、救いの場であった!)であったわけであり(たった6年間であったが!)、様々な人との出会いが、その後の私達をつくりだしてくれた所でもあったということである!

○改めて、「受賞」のことを想つ!!

ということ、ここで、上記の「東京物語」を事細かに記すことは不可能であるが(しかも泊6日の旅であったので!)、折角でもあるので、記憶に留めて置きたいことを幾つか挙げておきたい。もちろん、この旅の大義名分は「社会教育功労賞」授与式への出席であったので、まずは、それについて記しておく、セレモニーについては、流石?文科省のそれではあったので(規模は小さかったが?)、厳か、かつ抜かりのないものであった!

我が奥さんは同席できなかったが(やはりそれは心残りである!)、その間、皇居や東京駅への散策を楽しんだようであるので、それはそれで良かったと思っている!出席者の中には、旧知の人が3人もいて、思わぬ再会となったが(名簿上は、他にも何人かはいいたが、会場には姿はなかった!)、受賞の心境には、人それぞれのものがあつたことは、推して知るべしということであろう!!

私の場合は、「功労」と言われても、少し面映ゆいというか、今更?というか、そんな不謹慎な思いで、式を眺めていたというのが、本当のところであったが、ただ、推薦してくれた沖縄県教育委員会(動いてくれた人)には感謝をしなければいけない!こういうことは、そうそうあるものではないからである!

だが、一方で、私が願っているのは、私の「功労」よりも何よりも、これからの人達(とりわけ心ある人達が、厳しい状況かもしれないが、一人でも多くの仲間を作り、そして増やし、その思いを成就してくれることである(それがなければ、私の「功労」の意味はない!!)!

○「報復」と言う名の不幸!そこには「負の連鎖」しかない!

最早、ここに書くことさえ忌避したのであるが(書くこと自体が空しい?)、既にここに書き込みを入れておいたので、敢えて書き終えておきたい!何とも、複雑ではある!要は、世界はまた、「『報復』と言う名の不幸!そこには『負の連鎖』しかない!」に陥っていきそうであるということである!自国民の命や土地財産(利益)が、不当に(武力で)奪われたからというのが、その理由とされるが、その背景には、様々な歴史的経緯があり(宗教上の理由も含めて!)、単純には、その善悪(言い分)を判別することは難しい(そのように理解しなければ、生々しい現実を受け止めることは、さらに難しくなる?)!!

しかし、やはりそこには、今を生きる、それこそ幾多の困難や不幸を乗り越えて来た、多くの国や人々の想いや約束事がある!それを形にしたのが、「国連」という名の組織であり、その存在意義であろうが、それを無視した、否、逸脱した行為は断固として糾弾されるべきであり、その罰則は厳しく適用されなければならない!とは言え、今回ほど、その限界や無力を感じさせたものはない!これが、人間社会の偽らざる姿なのかもしれないが、何とも切ない真実でもある!だが、問題の本質は、そうした大それたことを妄想し(「正義」と言う名の暴挙にすり替え!)、多くの人々を困惑させ(時として、その命まで捧げさせて!)、自らの権勢欲を顕示しようとする者がいるということである!それが問題なのである!

ただし、その一方で、さらに哀しい?のは、そうした人物が、自らに同調する者には庇護や恩恵を与え、逆に反対する者には、容赦ない仕打ちや攻撃を加えているのを、ただ黙って見過さなければ生きていけない多くの人々が(私もそれに含まれるが!)、そこに居るということである!自分さえよければ、自分さえ安全であれば、それはそれでよい(仕方がない!)というようなことにもなるのであるが、そうした現実が、確実に存在しているわけでもある!ただ傍観・諦観だけではいけない!そうは思うが、今後どうなるかではある(他人任せとはなるが!)!! (井上)

○改めて、「幸せ」とは何か？

これも、既に用意していたものであるが、そして、以前にもどこかで書いたことがあるように思うが（具体的なことは覚えていないが）、今、再び、標題のことを書いておきたい！と言うのも（表面の続きともなるが）、相変わらず、どこかで誰かが（国内外を問わず）、肉親や友人・知人のことを思つて涙している姿を見るからであるが（近々では「能登半島地震」関係の光景）、いつ終わるとも分らない戦争（一方的な侵略もある！）の中で、多くの人の命や健康、そして財産が奪われていることを思うと、やはり人間の幸せを願わずにはいられない！

しかし、ここでは（私にしてみれば）、その人（達）の命や健康、そして財産、否、その人（達）の幸せについて云々することはこれ以上出来ないで（それは、ある意味許されない！）余りにも事実が重すぎる！、その「幸せ」が、どのような状態で維持されているのか？その辺のことを、今更ながらではあるが、「社会」や「国家」との関わりの中で捉えてみたいということである！！もちろん、「幸せ」は、実体的には個人的なことであり、「社会」や「国家」のあり様とは、直接的には無関係である！！要は、心の持ち様（人生観や価値観）によって、その態度（感じ方）は変わるといふことであるが、その前提には、その人が生きていく「眼前の事実」、つまり、自分がどのような国（社会）で生まれ、育ち、そして、今を、生きていくのかということがあるといふことである！

しかし、人は、不思議な生き物であり（ある意味自分勝手）、どんな逆境にあつても「幸せ」を感じることが出来るし、逆に、どんなに豊かで恵まれた環境にあつても「幸せ」を感じられないこともある！！「健康」「仲間（愛）」「財」が幸せの三要素と思うが、どれか一つでも欠くと、それは危うい！ただし、「仲間（愛）」だけは、自力（努力）ではどうすることも出来ない！そこに喜悲劇が生まれる！！そのことだけは事実であるようである！！

○ネット社会の功罪？その「功」だけを賢く紡ぐ！

このことについては、往々にして、その「罪」についての話が多くなるが（それに起因する犯罪や社会問題が多発するという点でも）あるが、それをマスコミが喧伝している？「知」と「痴」の乱舞？、考えようによつては、それを賢く活用し、「功」だけとなすことが出来れば、やはり大いなる文明の利器と言へることは間違いないということである！

それを実感するのが、古代史関係のブログや動画であるが、例えば自らがその場（遺跡等）に行つて、何らかの考察や証拠入手が出来たとしても、そしてまた、誰かの著作物を読んだとしても、そのほとんどは、ごく限られたものであり（たとえそれが貴重なものであつても）、しかもそれだけでは、共通の財産（真相解明への共有知）とはならない！！

要は、工夫をすれば、それが可能だということであるが、ただ、私の場合は、それへの参加は、残念ながら目と腰の続く限りはということではある！しかし、いずれ誰かが、そのビッグデータを構築してくれるかもしれない！！ただし、それは、いわゆる「専門家（研究者）」ではない！！

＜短歌に託して無理矢理被せたい○○物語！＞
・ストーリーは まったく違うが
私にとつては これが「東京物語」！！

・功労賞 そこにあるのは別の意味？
ただ、今は それでよいのだ！

・何故にある 「報復」と言う名の不幸！
「負の連鎖」と分かつていながら！

・“幸せ” それは何とも 不思議なもの？
しかしそこには 大前提あり！

・ネット情報 賢く使えば 力となる！！
ただ目と腰の続く限りは！

＜特別コーナー＞堂本彰夫の古代史旅枕②

○「記紀」は、「新旧倭国勢力」の実体を知らせたくなかつた！！
さて、改めて、先号で述べたことは、北部九州の「新旧倭国勢力」（天皇主 勢力と 開化天皇 勢力）が、その攻防によつて、北部九州と近畿大和に、言わば「二極体制（権威）」を形づくつたものの、何故か、「記紀」においては、それらの関係が隠され（捏造・脚色され）、結局は、第10代の「崇神天皇」の統治から（「ハツクニシラスメマフミコト」）、実質的な「近畿大和における」、彼らの「万世一系の物語」が始まつたように示されて（見せかけられて）いるということである！！

なお、そこに至るまでの経緯は、いわゆる「神話」や初代「神武天皇」による「東征」物語、そして「穴史八代」とされる天皇（経緯・開化）の御代に示されていることになるが（ただし、事績そのものは少ない）、それら全体の史実解明は、まだまだこの先の話として（もちろん私独りでは、到底それは不可能であるが）、ここで問題は、その出発点としての北部九州の真相を、新たに解明することである！言い換えれば、何故、北部九州の二つの新旧勢力が、共に隠されているのかである（形の上では北部九州の新勢力「開化天皇」から 巫神天皇 への引継ぎがなされているように見えるが）！！

要は、建国史（『日本書紀』）の編纂者（直接的には藤原不比等）にとつて、その双方は、あまり前面に出したくなかつた（知られたくなかつた）勢力であつたということであるが、端的に、「開化天皇」は、実は「紀（采）姫氏」を中心とした勢力（「邪馬台国連合」の最後の王）、「天磐主」は、初期の「邪馬台国連合」によつて滅ぼされた（移動を余儀なくされた）「倭国」の勢力（57年に命命を貰つた 倭 奴国の最後の王）と考えられ、しかも後者は、先に近畿・大和に移動していた旧倭国勢力（おそらく「隠匿」と「隠匿」であつたわけであるので、記紀編纂側は、彼らの覇権を奪つたことにもなるので、その存在は（少なくとも北部九州におけるそれは、消された（隠された）ものと考えられないか）！！（つづく）（堂本）

＜編集後記＞年始早々の大災害や事故のことも、人の世の常で、徐々に遠ざかつていっているように見えるが（だが、能登半島地震だけはそうではない）、私（達）は、そのことを傍目に、いつものような日々を送っている！そして、無理矢理？ではあるが、数少ない楽しみを心待ちにもしている！そんな中での東京行きでもあつたが、ここでは詳しく書けなかつたので、次号にて！（井上／堂本）

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 22 号

発行日
2024. 2. 29
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○改めて「閏年」に想う！「調整」は英知であるが！

さて、今年は、その実感はあまりないが（東京オリンピックの開催時期延期のせい？）、例の、4年に一度の「閏年」の年である！2月の日が一日多いわけであるが、それにしても、その月になれば、何と短い月なのだと、改めて思わざるを得ない（逃げる二月）！しかし、その工夫（調整）は、「暦」（一年）というものを考案し、それに基づいて生活を送っている人間社会の、言わば「英知」であることは言うまでもない（その工夫や、計算そのものは複雑のよう！）

しかるに、私達は、その「閏年」によって、もろもろの社会システムの正常な運用を、あたかも当たり前のように享受することが出来ているわけだが、それは、考えてみれば、人間社会の都合？による対処方法であり、天体自体の運行を変えるものではない（それは変えられない！）！

何を言いたいのかという点、4年に一度、一日増やさないと、つまり、そこで、こちら側の設定（工夫）を、自ら調整していかないと、自分達が困るということである！要は、それは、科学によってもたらされたものではあるが、最善態にするためには、そこに、絶えざる努力が求められるということである（完璧な調整は出来ないが！）！

であれば、その年に「オリンピック」を開くということでは、その間様々なことが諸国家間にあつても、その時は、必要な「調整」がなされ、全体では「調和」しているということを示すという意味にもとれるが、残念ながら、見せかけ（その時だけ）の「調和」もあるが、だから、大切なのは、その「調整」がどうなっているのかを見極めることである！私達は、そこに、改めて思い至る必要があるが！

○みんな頑張っている！特に、後期高齢者が！

ところで、ここで是非とも書いておきたいことは、標記のように、「みんな頑張っている！特に、後期高齢者が！」ということである！もちろん、これは、私の「東京物語？」の副産物（予期せぬ「お土産」？）でもあるが、まだまだ後期高齢者にはほど遠い！私が、足腰の痛さや理由に（実際にそうなので、仕方がないとは言えるが）、何とも情けない行動をとっているということの反省と、これからの踏ん張りへの「喝」としなければならぬという、自己奮奮への意味を込めてのことである！

その代表となるのが、密かな楽しみとしていた、浅草での寄席見物のことであるが、最後に登場した、かの「おぼんこぼん」という漫才コンビである！改めて、彼らの年齢は、共に75歳であるようであるが、その芸風（話術はともかく※これは、テレビ等で分かっていた！）は、とても洒落で、特に披露してくれたタップダンスは、その年齢には到底似つかわしくないものであった！

これが、まさに「芸に生きる人間」の強さであり、執念でもあるということであるが、それには、並大抵ではない努力（苦労）が払われているが、「U字工事」も面白かったが（芸人魂みたいなものも感じられた）、この後期高齢者のそれは、その域をはるかに越えていた！

ちなみに、後期高齢者と言えは、私と妻を、今回も温かく迎え、多くの世話をしてくれた日夫妻（二人とも、さらなる年上！）も、体の不具合は、私よりも多いようであったが、その行動力と精神力には凄いものがあつた（恐るべし！）！みんな、頑張っているわけである！

○改めて、私の「東京物語？」を振り返る！その1

折角、意を決して「東京物語？」を敢行したわけであるので、何らかの記録を残しておきたいということで、ここに書き始めていたのであるが、最早かなりの日数が過ぎ去ってしまったので、その記憶（余韻？）も、かなり怪しいものとなっている！幸い、事前に書き込んでいたものもあるので、それを素に、改めて、書き記していきたい！ただし、絶対に書いておくぞと決めていたことが二つあつたが、それ自体は、哀しいかな？忘却の彼方にある（笑）！

それはともかく、まずは初日（8日）、浅草に行き、「もんじゃ焼き」を食べて、いつもの「アパホテル」（田原町）に投宿した。次の日は、主目的の？授賞式に臨むために文科省へ行き（虎ノ門駅迷走？）、その後、我が奥さんと合流し、その一角で昼食（何故か？丸亀うどん！）。そこからまた、再び浅草へ移動（神田経由銀座線）。そこで（東洋館）、「おぼんこぼん」等の、貴重な芸を堪能した！

次の日は、新御徒町駅（大江戸線）を経由して、小石川後樂園に行き、梅花見物。そこから、有楽町線を利用して、池袋、そして、懐かしき常盤台公務員宿舎（そこに6年近く住んでいた！）及び道向こうの「平和公園」（随分と変わっていた！）を訪れ、その後、待ち合わせをしていたSさん（当時の隣人の一人）と会い、昼食（何故か？パスタの店！）。さらにその後、そのSさんの自宅（宿舎近く）にお邪魔し、旦那さんとも再会し、昔話に花を咲かせた（美味しいビールやコーヒも頂いた！）。そして、初めての「川越」に行き、その温泉旅館にお世話になった。しかし、夕食は、何故か？場末の中華料理店であつた！ちなみに、川越は、流石「小江戸」と呼ばれるに相応しいところであつた！

次の日から、長年の親友であるF夫妻にお世話になるのであるが、最初は、飯能市の「多峯主と山」への登山（ハイキング）をして、その後、彼のマンションで、豪華な夕食を馳走になり、この日の投宿先である、本板橋駅前のホテルに、徒歩で向かった！（※以降は次号にて）（井上）

○これを「ポリコレ」と呼ぶのか？だが大切なのは？

ひよんなことから、「ポリコレ」という言葉に遭遇した！そして、それが、いつとはなしに世間に広がって来た「言葉の使用の違和感？」のことを指していることを知った（これまた恥ずかしい話ではあるが）。表現を、「ここまで変えるのか！」といったことだが、それは、「ポリティカル・コレクトネス (political correctness)」の略で、「政治的妥当性」「政治的正当性」という意味があるようであり、ネットでは、「他者に対して、人種、性別、国籍、宗教、年齢、障がいなどを理由とした『差別的な表現を正す』という考え方です。英語の頭文字をとって『PC』とも呼ばれることもありませう。」とある。

「例えば、以前は看護師の男性を『看護士』、女性を『看護婦』と呼んでいました。しかし平成14年(2002年)3月には、男女共に「師」にあらためられました。これは、職業において性差別をなくしたポリコレの一種です。そして、「社会では、さまざまな人たちが共存する多様性が進んでいます。その中で、あらゆる人を尊重するために、ポリコレが求められるようになってきました。アニメや漫画、ゲーム、映画、テレビ番組、芸術などの世界でも、ポリコレは広がっています。」

さらに、「ポリコレは、差別的な表現を是正することで多様な人が尊重される社会の創造につながります。そうした社会では、個人が能力を發揮し、生き生きと活動することが可能です。このことは、社会的・経済的・政治的に参画する力になり、SDGsの「目標5」(ジェンダー平等を実現しよう)、「目標10」(人や国の不平等をなくそう)の達成に貢献します。」ともある。

確かに、それが正義であり、基本的には是非そうであって欲しいが、ただ表現だけが変わっても、内実が変わらなかつたり、予期せぬ対立を生むだけのものではあつたりすれば、何のための変更かと思う部分もある！要は、そのことよって、誰が喜ぶ(幸せになる)のかである！

○これが、求めていた光景！そして、永遠の仕事？

過日(17日)、34年前の、最初の学年の卒業生が、我が「岳陽舎」を訪ねてきてくれた！昨年の忘年会の席上で、改めて、ここで顔を合わせることを約束していたのであるが、それが実現したのである！人数は、5人であつたが(H.S.A.T.T※名前の頭文字にて！)、例の受賞のことも話し、大いに盛り上がった！天気が心配であつたが、本当に、やつてよかつた(これについては、後日談があるが、そのことは、次号等で！)なお、残念ながら、この日來られなかつた連中もいるので、またの機会を期するのみである！

そしてさらに、来月には、県外に住んでいる女性二人(ミ生ではなかつたが！)が、それぞれ訪ねることになつていゝ学年、年齢、コース、そして仕事も違つが、今なお、私(否、井上氏※以下同じ)のことをリスペクトしてくれているようである(ただ懐かしいだけではあるが！)！こんな嬉しいことはないし、そういうことを、私は求めていたのであり、それが、私の永遠の仕事？ということでもある！「岳陽舎」は、人との出会い、再会の場なのである！

・短歌に託して、みんな、頑張っているのだ！
・「閨年」！「調整」の産物であるが
意味するところ、甚だ深し！

・みんな頑張っている！特に後期高齢者！

そこにあるは、生の昇華はな!!

・思い出せないものもある！

だが記しておけば、蘇るものもある!!

・ポリコレ？ 大事なはその中身！

私利・見せかけ超えた 正義であれ！

・求めていた光景！ 永遠の仕事？

それがまさしく「岳陽舎」だ！

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕(2)〇〇

○ひよつとしたら、「神武東征」は(も?)「合わせ鏡」!!

ところで、ここで少し(否、実は大真面目に)、かの「神武東征」のことを考えて直してみたい！つまり、結局のところは、それは、北部九州(ある意味では九州全域?)から近畿へ移動した人々が、吉備を経由して(おそらく出雲を抱き込んで)、奈良(天和)に新勢力を樹立したということである(北部九州に残っている勢力に対抗して?だから、それは、単なる東遷ではない!)。そして、「記紀」は、その大移動を、「出雲の国譲り/大和の国譲り」という形で物語にしている!!しかも、それは、ある種の「合わせ鏡」のように!!

どういふことかと言つと、その「神武東征」以前に、「物部氏」の祖の「饒速日(ニギハヤヒ)命」一族(尾張氏や海部氏を含む)→ウマシマジノミコトが(大和に先着していたという話(記紀)より)は、彼らが、「出雲族」と組んで(ウマシマジノミコトとの融合?)、最初の王権を形成していたことを示しているといふことである(「三輪土師」!!「神武」の大和での振舞いは、それに対応するものであることは明らかである(出雲族との婚姻話等)!!

であれば、その物語は、ある二つの勢力(集団)の東方移動のことを示しているのではないかと(いうことでもある)すなわち、一つは、遠賀川流域からの、「物部氏」の祖の「饒速日命」一族のそれ、もう一つが、日向からの「神武」一行のそれである!!もちろん、それは、別々の動きであつたが(それは、おそらく「饒速日」と「饒速日」の二つを指している)挿入された「日向二代」の物語には、そのことが投影させられている!!「記紀」は、それを、「神武」の東征話として、何故か?一本化させているといふことである!!

しかるに、その根拠(傍証?)は、「記紀」にある大きな違い、例えば、水先案内人と出会う場所(速波の門)と香海地での滞在年数(とりわけ「吉備」であるが、そこには、編纂者の思惑があり(異なる記憶の違いではない)、それが、ある種の「合わせ鏡」となっているといふことである)「あまのむすめ」に出会う場所は、「明石海峡」(「記紀」と「豊後海峽」(「記紀」)、「吉備」での滞在年数は、8年(「記紀」と3年(「記紀」)である)!!(つづく)

〈編集後記〉やはり、あつという間に、2月が過ぎ去ろうとしていゝ!!しかし、嬉しいことは多々あつた!!しかも、「禍を転じて福と為す」ではないが、腰痛の対処法が見つかり、徐々に快方に向かつていゝ!!来月は、さらに前向きで動いていけるであらう!!そうしなければ、今月の出会いがもつたらない!!(井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 23 号

発行日
2024. 3. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○鹿児島島に行ってきた！再会あり、予期せぬ出会いあり！

前触れしていたように、この8～11日の間、鹿児島鹿屋市に行っていた！それに関わる記事をここに書くように思っていたが、いつも以上に？こっぴどくは足りそうにない！何度か小出ししながら書いていく他ないが、まずは第一弾として、そこでの再会・出会いについて書いておきたい！旅の目的は、もちろん教え子？であるS君の研究調査の協力ということであったが、私にとっては、当地の卒業生との再会も、大きな目的であったということである！！

しかるに、S君の尽力によって、霧島市と宮崎市に住むT君とI君に再会出来たわけであるが(彼ら3人は、大学の同期！、6年前？にも会っている(霧島山にて、風貌等については、さほど驚きはしなかったが(かなり老けてきた？私にはそれ以上の「お爺さん」！ただし、昔の関係だけは変わらず？)、それぞれの仕事や生活での苦労？が滲み出ているようにも思えた(それだけ、歳月が流れたということでもある)！

かく言う私は、彼らより遥かに年輪を重ねているわけであるので、そのことについては、もうこれ以上は言わないが、彼らとの再会が、とても嬉しいものであったことは言うまでもない！しかも、今回は、予期せぬ出会いも幾つかあり(S君の両親や妹弟との出会いも含めて)、私にとつては、まさに「再会／出会いの旅」でもあったということになる！なお、今回の主目的であった「CS(コミュニティスクール)の実態調査に関わる感想や思わぬ成果？」に関わる部分は、別途書き綴っている「新・教育協働への道」で、是非とも取り上げたいと思っているので(少し日数がかかるかもしれないが？)、その旨、ここでは書き加えておきたいと思う。

○状況が変わる予感？しかし、好転ではない？

相変わらずの政権の低迷？存続の危機？そして、某国の、次期大統領選？の動き、それらを見れば、ひよっとすると、これまでの「世界のパワーバランス」の構造的転換？が予見される？であれば、これまでのような、ある意味自分達だけに都合のよい受け止め方や関係、あるいは一方的な依存(逆に反発も！)、無責任な言動は、その転換？の餌食となる？言い換えれば、誰しもが、その被害者顔をする？ことが出来なくなるということでもある？その意味では、決して好転ではないのである！

要は、それぞれの国(人々)は、これまでのパワーバランスの上に安穩として立ち続けているわけにはいかないということであるが、では、そこには何が必要なのか？まずは、その新たなパワーバランスの本質を、内外の情勢を冷徹に見据えながら見極めていくことである！そして、自国(自力)で解決すべきこと、あくまでも国際協調の中で、応分の働きを發揮すべきことを、改めて自覚し、そのための決断と、それに必要な努力を、内外に示すことである(これは、国内における、各地域間の諸勢力やその関係にも言えることである)！

もちろん、それには、大いなる反省と新たなストラテジーが必要となるわけであるが、そこには、そこに生きる人々の、それこそ本気の覚悟と、それを実現する努力が求められるということでもある！もし、そうでなければ、その国は亡びる(あるいはどこかの国の属国？となす)！！そんなことさえ、危惧される！！ただし、人間は、そんなに愚かではない！新たな知恵がきつと顔を見せる！

○改めて、私の「東京物語？」を振り返る！～その2～

さて、ここで、遅ればせながら(さらに日数も経ったが！)、先号で書き残していた、かの、私の「東京物語？」を完結しておきたい！予感があったが、やはりあの筆致(スペースも！)では、ほとんど何も書けなかった？要するに、最低限、我が懐かしき、そして思い出の場所(浅草、霞が関／文科省、飯田橋／小石川後楽園、池袋、上板橋／前居住地)を転々としたことだけを記したわけであるが(この間、例の「Seiwa」の便利さを再確認もした！)、それを前半とすれば、ここでは、その後半？を書き加えておきたいということである！ちなみに、川越であるが、訪問して初めて分かったが、イメージ(芋のまち！)を遥かに越えた、歴史と文化の融合するまち(まさに現代の「小江戸」)であった！

ということ、そこまでを前半とすれば、その後半は、やはり念願の？房総行きである！温かい？南房総の地を感じたかったわけであるが、行きのルートは、かの「海ほたる」がある「東京湾アクアライン」であった(人間の技術力の凄さには、今更ながら感服した！)。もちろんそこから千葉県(木更津)に入るのであるが、鮮明に思い出されるのは、「鋸のこぎり山」(遠くから見れば、まさに「鋸」！！)である。どでかい「大仏」等があり、おそらく「修験道」の一大聖地でもあった！！私は、とても「修験者」にはなれないことを思い知った(足腰の不調が最高潮となった！)、観光客の多さは意外であった！最後に「勝浦」であったが(かなりリッチな食事？)、帰路の「フラワライン」や「鴨川」、そして、おいしい蕎麦屋、その後の「空港5時間」と、楽しい記憶は残る！

なお、もう一つの、私の東京での思い出は、もちろん上野(鶯谷も？)であり、公園の一角(片隅？)にある、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター(当時は「社会教育研修所」、通称「国社研」)にあることは言うまでもない！だが、月日は流れ、そこへの想いや感傷(いろいろあった！)は、今やほとんどが、我が胸に沈潜(30年近く、ほぼ毎年のように訪れていたが！)！！ただし、それについては、またいつかどこかで書くことであろう(そこが原点なのだから)！！(井上)

〇二二〇「れを書くのは、何とも切ないが？」

（ここで、このことを書くのは、かなり躊躇もするが、そして、切なくもあるが！）、一応予定はしていたので、書き記しておくことにしたい。それは、某国のN氏の葬儀（その死の真相については、ここでは触れたくないが！）における光景のことであるが、厳しい監視と統制の中で、心ある人達が、予想以上に、自らの危険（命？）も顧みずに、その場に集まっていたことである！彼らの想いと行動に思いを馳せると、まさしく心痛ましい限りである！

もちろん、これは、いつものネット情報からではあるが、やはり、どんなに苦境に立たされても（命の保障が無くなっても）、思いのある人間、そして正義が、いかに大切なことを示す（行動で示せる）人々がいるのである！そのことが、たとえ遅ればせながらではあっても、某国から知らされたわけである！本当に切ない光景ではあるが、そのことに、世界（私達）が、大いに勇気づけられたということでもある！某国も、やはり捨てたものではないのである！

ただし、そうは言っても、表の井上氏の記事にもあるように、世界全体のパワーバランスが、新たな局面決して好転ではない？さらなる危機？を迎えようとしていることは、おそらく間違いない！！どんな状況（世界）となるのか、まだまだはつきりとはしないが、それに向けての心づもりや、新たな覚悟？が、それぞれに必要なことは言うまでもない！また、それと並行して、自然災害等も増えるかもしれない（ただし、その発生自体はどうしようもないが！）！！

だが、そうは言っても、人間は、またまた（否、永遠に？）健全であり（賢く、優しい人達が、世界中どこにでもいるということ）、幾多の困難や犠牲を重ねながらも、その時々望ましい姿・形を形づくることが出来る！そしてまた、そうした動きは、新たにネットを通じて出て来ている！人間社会とは、そういうものなのでもある！

〈短歌に託して〜みんな、今を生きている〜〉
様々にある 人の生活せい！

それが垣間見えるも 深きは分ならず！！

・実家^{まごころ}にて 子らの活躍^{せいかつ}をひたすら願う
老いたる両親^{おやぢ}に 我が身重なる！

・パワーバランスの構造的転換？
何が起きるか？ 脅威であり 現実でもある！！

・東京物語？ 勝手な言い草ではあるが
我にとつては かけがえなきものなり！

・某国も やはり捨てたものじゃない！
どこにでもいるのだ！ それが人間社会なのだ！

※特別編く肝付（属）旅情く
生きる意味 そして価値
それは 今、そこにある現実から！

・始良と吾平 何故に分かつ？
その原因は 大隅の来し方にある？

・吾平山陵 いつ誰がそこに？
隼人の苦難は そに如何に絡む？

・予想以上の 高き山並み 平野を圍繞す
そこを流るる 二つの大河！

・鹿屋の「鹿」は 何？
そして 「鹿兒島」の「鹿」との関係は？

※とにかく、これもまた、楽しい旅であった。教え子達のお陰である（事務手続きは、うんざりであったが！笑）！！

〈特別「コーナー」堂本彰夫の古代史旅枕②〉

〇「古事記」の方は、「饒速日^{ニギハヤヒ}命」（物部族）のそれ？

先母では、ある意味大変な妄想^{まぼろし}を記してみたが、しかし、そのことは、図らずも今、真実のものともなつてきているのではないか？すなわち、両書（記紀）の違い、つまり、それらは、単なる相補的な史書（正史）ではなく、対外的なものと対内的なものと、いうような関係ではないか？（「古事記」は、おそらく「太（多）氏（トシノミ）氏（ミ）」によるものであり、彼らは、微妙な立場で（徐々に政権の中核から外されていく）、正史「日本書紀」の記述（嘘？）の大枠は甘んじて認めるが、自氏にとつて決して譲れないところは、それなりに暗示しているのではないかと、ということが分かつてきているというところである（それが、彼らにとつての矜持でもあった）！ただし、彼らの言いが、すべて事実であったかどうかの保障はないが！

そして、そういう中で、かの「神武東征（物語）」は、事実上は、北部九州からの「饒速日^{ニギハヤヒ}命」一族（物部族）の近畿移動を投影させているというところであるが、その意味では、かの「日向神話」や、そこから生じる「神武東征」の語は、「書紀」の方による虚構の産物なのかもしれない？ただし、その元ネタは大いにあった！「出雲族」の進出や「隱岐」の存在？、そうであれば、そのもう一方の「中南部九州」の状況を、我々は改めて解明する必要がある！実は、それが、かの「熊襲（霧瀨・豊後）」そして「隼人」との関係であり、おそらく彼らが絡んだ「北部九州」の状況変化（特に、背振山系と高良山周辺で繰り返された事実？）だということである！！

しかるに、そこにおける「邪馬台国（連島）」と「狗奴国」、そして、「出雲」との関係が、実に複雑な様相を呈しており、その実態（体）と、後の推移を明らかにすることは、現実には、とても困難であるというところではある！だが、その間接的な「合わせ饒」となるのが、「記紀」に示された「神話（神代）」と、いわゆる「大史八代」の部分（巻末集ヤマトタケルの話も含めて）であることは、おそらく間違いないであろう！ただし、それもまた、まだまだ感觸の域であることは言うまでもない！（つづく）（堂本）
〈編集後記〉折角の南部九州（大隅／鹿屋地区）への旅ではあったが、その古代史の情報は、残念ながら、ほとんど得られなかった（ある意味当然であるが！）。だが、今月末には、再び、長女一家の引越先である宮崎市への旅が待っている！これもまた、楽しみではあるが、いつまで出来るかではある！！（井上／堂本）

「岳陽」と共に

第 24 号

発行日 2024. 3. 30
 編集・発行 井上講四／堂本彰夫
 ※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
 Tel:098-963-9282
 E-mail: gakyuou17@outlook.jp

○一年間を振り返って！新たな契機となったか？！

気がつけば、この『岳陽』と共に」も、早一年が過ぎようとしている！どのようなタッチで、そして、内容で書いていくのかという不安(迷い?)もあつたが、途中からは、その方針も徐々に固まっていき、これまでのような書き振り(記事内容)となつていった次第である！そして、もちろん、ここでの記事作成が、この間の私の生活、いやいや生き甲斐の中心となつたわけであるが、よくぞここまで頑張つてきたものであるということでもある(目や腰、そして下肢の不具合は、さらに進化した！だから、我が奥さんには、多大なる心配と迷惑をかけた！)！

しかし、当然これは、私にとつての新たな始まりの、ほんの第一歩に過ぎない(極端に言えば、我が人生の72分の1！)しかし、その重きは1分の1？)!!すなわち、ここでの書き物が、これからの私の、次なる生きる意欲の契機となつていくかどうか重要であるということである(ただし、いつまで続けられるかは、また別の問題ではある?)！とは言え、そんなことよりも何よりも、やはり私の生き甲斐(喜び)は、ここ「岳陽舎」での出会いや再会であることは言うまでもないことである(そのためにここに居住しているのだから?)！

「ここ数年間の憎きコロナ！による(本当は、それだけではないのである?)、その停滞・不調は(最近では、それでもないが!)、大いに悩ましいことではあつたが、電話やZoomによる交流が一方ではあり、結果的には満足できるものであつたようにも思える(また、そう思わなければ、交流をしてくれた人達に申し訳ない?)!!そんなことを思いながらの昨今である！という)ことで、今後とも、双方で頑張ろう！

○奇跡のようない、そしてつながらり？！

そんな中、これは、先号で紹介した「鹿屋」での出来事であるが(その意味では第二弾!)、人の出会い、偶然の再会が、これほどまでの奇跡を生むということである(本当に鳥肌ものであつた!)。残念ながら、ここでもこれ以上は書けないが、別な教え子(鹿屋在住、旧姓O)の弟さんと、訪問中の小学校で再会?したのである(彼ははこの教頭であつた!)。途中から、当時沖縄で会つた(一緒に食事をした、姉の先生ではないかと思つていた)ので、お互いそれが分かつた時には、びっくり仰天(その後Oとも話をすることができ、さらに、後日そのことを聞いた両親が、わざわざ焼酎の贈り物までしてくれた!)!!

しかも、そうしたことは、これだけでない!昨日(17日)も、別な卒業生(OとK。Kは二人の娘を連れて!)が、はるばる福岡と大分から、一緒に訪ねて来てくれた!Oは、4月から絶海の孤島?A島(村。一応東京都!新しい仕事先へ、そして、Kは、新たな所への引越しが待っているという。通常の訪問(観光がてら)であれば、ここで特筆することもないが、その日程(Oは日帰り、Kは1泊?)を聞けば、彼女達の来(帰?)の沖の目的が、何か新たな出発に向けての踏ん切り(うまく表現できないが!)を、私に伝えさせるものであつた!!

事程左様に、こうした出会いや再会は、私にとつては、まさに奇跡のようない(後者のそれは、まさに貴重な時間、そして、お金も?)を、はるばる私との再会に使ってくれたということ)、改めて、それぞれのこれからに、幸あれと願うばかりなのでもある!

○やっつてはみたが、果たして新たな動きは見られるか？

そこで話は変わるが、過日(16日)、玉城青少年の家との共催で、「学びつながら地域づくりを考える」オンラインセミナー(今期第2回目)を行った。今回は、別途前触れしていたと思うが、「ひとづくりとまちづくりの循環」そこには何が必要なのか」というテーマで、4人の県内登壇者(MJ、MS、YAMHさん)と県外ゲストのTHさん(N県Y村在NPO法人GW自然体験教育センター代表理事)の協力で、何回も私の言う「心ある人」達の出会いの場を創出した(まさに私の企画である!)!!

インタビュフォーラムという名の下の、私の、久方振りのMC&インタビュアーで進めたわけであるが、実は、久し振りの開催で(途中、当青少年の家の新館移りの期間もあり!そして、なかなか事例発表者も見つからず?)、どのような感触が得られるのか?かなりの不安もあつたが、一応は、初期の目標(密かに図っていた、当該5人一緒に顔合わせ!)は達成されたものと思われる(開催中の彼らや参加者の反応、そして事後のアンケート結果より)！

とは言え、5人の登壇者の苦労話や思ひの深さ?については、もつともつと聞きたかつた人も多かつたとは思われる!

もちろん、それについては、当初から織り込み済みで(2時間という時間は当然短い!)、それなりの対処と理解を求めていたわけであるが(案内での事前情報入手の徹底を含めて)、それでもやはり不満はあつたのである(アンケートで、それを表明した人もいる!ただし、一人であるが?)!!困つた消費者?であるが、こういう人は、その人の思いはともかく、どこにでもいるものである!そして、本当に、すべての人に納得してもらふことは難しいということでもある(しかし、以前は、私の責任も大いにあつたことは事実であるが?)!!

ということ、これが、私から出来る最後の働きかけ(お節介?)であることは言うまでもない!!そのことは、はっきりしている!だから、ここからどのような動き、人のつながりが生まれるかなのである!ただ、密かに狙つた私の有終の美?ではあつたが、何故に届かぬ我が思い?またしても持ち越しか?ということでもあつたわけである!!ある意味、無念?(井上)

○そんなことは分かっていた！問題は、そこからだ！

さて、ここでは、表の井上氏の最後の記事にも関係することであるが、私堂本なりの、「心ある人」達への想いや、その人達への期待(願望)について記しておきたい！ちなみに、これは、ある意味では、今回の「鹿屋」での出来事(光景)に関わることもある(その意味では第3弾?)！それは、そこで改めて実感した、学校の管理職への社会教育主事経験者(とりわけ往時の「派遣社会教育主事」)の登用の妙であり、人事の壁への挑戦の成果?である！

それは、一言で言えば、学校を、言わば「一旦外から見ることによって、相対的な学校の状況や、それが必要とする地域との関係が、総体的に見える」ということである！しかもそれは、ある意味自ら動くことによつてしか十分には見えてこない！待っているだけ、一方的に協力してもらおうとするだけではだめ、そういう経験の重要性なのである！社会教育主事経験者は、そのことが、嫌と言うほど分かつている(もちろんそうではない人も多々いるが?)！だから、自ら動く！知ろうとするのである！

ただし、通常は、そんなことまでして、自らの要望や関係づくりをしたいとは思わない!!そこそこやれば、それでよいのである!!ましてや、働き方改革が進められている昨今でもある!そんなことを思っている人は、ほとんどどいるであろう!!だから、意に反して(皮肉にも?)、そうした「動く管理職」、「地域と仲良しの管理職」は嫌がられる?挙句の果てには嫌われる?のでもある(尤も、その人の人間性自体に問題がある場合もある?)!!

しかしながら、一方で、今はまた(ある意味、いつでも?)、当該地域との関係づくり、様々な人や組織との協力関係づくりが求められている(社会に開かれた教育課程(CCS)や地域学校協働本部事業等)！そこに、私の言う「心ある人」達が、いかに生まれ、関わってくるのか?だが、単に「思い」だけではうまくいかない!そこに、「協働」の難しさがあるのでもある(でも、そんなことは分かっていたのだ?)!

○増えた！新たな楽しみ?宮崎(日向)も面白い?

ところで、この度、一応は心配していた双子の孫達が、志望高校に合格した(改めて、おめでとう!)！これで、予定している私(ここでは井上!)の宮崎行き(今月28日から来月1日まで)も、心置きなく決行できることになる！引越しの手伝い等もできなかった私であるが(その代わりにいったら怒られるが、我が奥さん、すなわち沖繩のおばあちゃん)が頑張ってくれている!)、新居だけは訪ねてみたいわけである(誠に我儘で、頼りないお爺ちゃんなのである!)！

しかもまた、先日再会した卒業生のI君とも、今度は、当地宮崎で会える(何にも出来ないかもしれないが、改めて私なりの激励もしたい!そんな思いで一杯なのである!)?もちろん、孫達への直接の祝福もしたい!そんなこんなで、宮崎への旅は、これから増えるであろうが、そこには、新たな楽しみも増えたということである!それが、実は、下に書いているように、宮崎(日向)の古代史への「似非旅枕」なのである(以前、高千穂にも縁があったが、その時はまだ、そういう状態ではなかった!)！

・短歌に託して、次なる歩み!人それぞれに!!
・一年間を振り返る! ただしそれは 72分の1!!
だがその重きは 一分の1!

・奇跡としか言いようがない?
それぞれにこれからに 幸あれと願う!

・密かに狙った有終の美? 何故に届かぬ我が思い!
またしても 持ち越しか!!

・そんなことは分かっていた!問題はそこからだ!
人事の壁を 如何に突き破るかだ!!

・吉報に 思い馳せしは 彼(ま)らの母
つまり我が長女(ま) とにかくよかった!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕(24)

○いよいよ次号からは、中南部九州との関係を探る!!
別記しているように、我(井上)が長女(ま)が、この度縁あって宮崎市内に転居する!一応、当地にある「宮崎神宮」や「生目神社(古墳群)」(の重要性?)は知っているのであるが、折角そこを訪ねられる機会が出来たわけであるので、これからは、それらが関わる、懸案の?中南部九州への古代史旅枕(もちろん似非?はあるが?)を築きむことにしたい!ということである!例えば、「神武東征(神話?)」は当然であるが、それと関わる「日向(三代)神話」、そして、「西都原土墳群」等の真相(謎?)を、可能な限り追ってみたい!ということである!

要は、知れば知るほど、中南部九州の当時の状況が、北部九州のそれと密接に関連していることが分り始め、いわゆる「熊襲(或る鹿屋)族」や「軍人族」、そして、「紀(姫木/紀/事?)氏」との関係も、改めて解明する必要があるとの結論からである!すなわち、そこには、かの「大和建国」の実態、あるいはその後における北部九州との関係の解明(ここには、北部九州と近畿大和との二朝並立の本源がある?)が、改めて必要であるという認識がある!ということである!

またまた、その認識は、いわゆる「妄想」の域を超えていないようにも思えるが、「記紀」とりわけ『日本書紀』が、その中南部九州との関係を、一方では強く示唆し(神話における天孫降臨)や「日向(代)及び「神武東征」さらには「景行天皇」や「ヤマトタケル」の「熊襲征討」の経緯、しかも、かの「軍人族」は、天孫族の一つとして位置づけられている!)、しかし、他方では、卑弥呼時代(3世紀中葉)の「狗奴国」や、そこにおける「狗古智卑狗」等の実態(魏志倭人伝)には明示!)等(極端に言えば、中南部九州!)については、ほとんど明示されていない!!これは、絶対におかしい(怪しい)!!

ということで、問題は、そうした中南部九州と北部九州との関係理解が、改めて求められる!ということであるが、その理解の鍵は、おそらく筑紫平野(両者の出会い(集難?)にある)こと(間違いない!!)(つづく)(堂本)〈編集後記〉発行日は30日としているが、今回は、都合により早いアップとなる!とにかく、あれからまた、1年が過ぎた!そんな中、内輪の話で恐縮ではあるが、やはり孫達の吉報は、私に、二重の喜びを与えてくれている!しかも、これで、安心して宮崎へも行ける!どちらも、ありがとう!!(井上/堂本)

